

事項一六 パリ講和会議準備一件

五〇九 十一月六日 在英國珍田大使（ヨリ）
内田外務大臣宛（電報）

対独講和會議ニ備へ我方全權タルベキ人ヲ予
メ歐洲ニ派遣シ置ク様稟申ノ件

第九八〇号

独逸ガ聯合側ノ提示スペキ休戦条件ヲ承諾スルヤ否ヤハ今
日未ダ予想シ難キ所ナルモ仮令独逸ガ之ヲ拒絶シ戦争ヲ継
続スル場合ニ於テモ其ノ屈服已ムナキニ至ル時期ハ余り遠
カラサルコトト觀ルヲ得ヘク從テ正式講和會議ノ開催期モ
追々切迫ノ形勢ト成リ来レル処日本ノ地位遠隔ナル事情ニ
鑑ミ帝国政府ニ於テ此ノ際速ニ全權委員ヲ御選任ノ上歐米
視察員若ハ特派大使等適當ノ名義ヲ以テ可成速ニ當方面ニ
派遣セラレ必要ニ応シ何時ニテモ講和會議ニ参列シ得ル様
予メ準備シ置カルル様致シ度ク差出ケ間敷儀乍ラ卑見申進
ズ

欧米各大使へ転電セリ

五一〇 十一月十五日 在中國林公使（ヨリ）
内田外務大臣宛（電報）

在本邦中國公使ヨリ講和會議ニ代表者参列
問題等二付問合アリタル件

第一〇五六号

十一月十四日章公使來訪陸外交總長ヨリノ電訓ニヨルトテ
近ク開カルヘキ講和會議ニハ參戰各國悉ク代表者ヲ出シ得
ルモノナルヤ又ハ關係少キ國ハ既ニ會議ニ出席セル國ノ紹
介ニ依リテ列席スルモノナリヤト尋ネタルヲ以テ本大臣ハ
追テ一般的會議開催セラルコトトナラハ關係國代表者ハ
總テ参列スルコトナルヘキモ從來開カレタル種々ナル会
議例ハ軍事會議若ハ「ヴエルサイユ」會議ノ如キハ皆特
別會議ナリト答ヘタルカ之ニ對シ公使ハ「ヴエルサイユ」
會議ニハ日本ヨリモ参列シタリヤ又右ハ日本ヨリ要求シタ
ルモノナリヤト質問シタルニヨリ日本ヨリハ從來ハ規則的
ニハ参列セサリシモ十一月一日以降引続キ松井大使列席セ

リ尚右ハ仏国外務大臣ヨリ日本關係事項ニハ日本國代表者

モ等シク列席アリタキ旨要求アリタルニヨルモノナリト述

ヘタルニ更ニ追テ開催セラルヘキ講和會議ニハ日本國代表

者ハ本国ヨリ特派セラルコトトナルヤト尋ネタルニヨリ

右ハ政府ニ於テ目下詮議中ニシテ未タ決定セスト答ヘタリ

次イテ章ハ之ハ私見ナリト前提シテ支那ハ講和問題ノ閃ス

ル限リ凡テ日本ト歩調ヲ併セ一致ノ行動ヲ執リタシト述ヘ

タルニ付本大臣ハ右ハ至極結構ニシテ日本政府ノ歓迎スル

所ナリト答ヘタル處章ハ青島還附ノ問題ニ論及セルヲ以テ

本件ハ獨乙トノ關係モ有リ又本大臣ニ於テモ尚研究ヲ尽シ

居ラサルモ從來ノ行懸上自ラ適當ノ措置ヲ講シ得ラルヘシ

ト信スル旨応酬シ置ケリ右御参考迄

五一 一 十一月十五日 在中國林公使（ヨリ）

内田外務大臣宛

休戦条約調印ノ北京ニ於ケル各種ノ反響及中
國ノ平和會議ニ於テ為スベキ主張ニ関スル論

議等報告ノ件

公第三一五号

（十一月二十五日接受）

大正七年十一月十五日

一六 パリ講和會議準備一件 五一

一六 パリ講和会議準備一件 五一

六三〇

タル後天安門ノ廣場ニ集合シ中華民国ノ万歳、協商國ノ万歳、正義公道勝利ノ万歳ヲ高唱シタル後特ニ招請臨席ヲ請ヒタル米國公使及英仏公使代表其他梁士詒代表蔡大學校長及華恭緯等ノ演説アリ特ニ米國公使ノ演説ハ此等学生ニ対シ深キ感想ヲ与ヘタルハ疑ナカルベク候將又英皇帝「ジョージ」陛下ガ十一月十二日早速親電ヲ徐大總統ニ送リ此喜ヲ共ニシタルノ一事ハ支那側ノ深ク感謝スル處ナルベク又英國ガ如何ナル勿卒ノ場合ト雖モ毎々其支那ニ於ケル重要ナル關係ト立場トヨ顧慮シテ忘レサル用意周到ナルヲ敬服セシメ候右親電ハ十三日ノ政府公報ヲ以テ公表セラレ居リ乃チ往電第 号既報左ノ通り

大中華民國大總統閣下現ニ對独休戰條約ハ已ニ調印セリ此度協商國ハ公道自由ノ為ニ戰ヒ最後ノ勝利ヲ獲タリ朕ハ謹ンデ誠摯ノ賀意ヲ貴大總統ニ致ス並ニ請フ貴國民ニ伝ヘラレンコトヲ

先是徐總統ハ十一月十二日附ヲ以テ協商各國元首ニ對シ祝賀ノ祝電ヲ發セラレタル由ニテ（未タ政府公報ニ公表セラレズ）其英國、日本、米國ニ對スルモノ如左

大英日本皇帝陛下支那國民ハ獨逸カ休戰條件ヲ承認シタ

米國大統領閣下

- 頤ヲ政府ニ提出シ其考慮ヲ求メタリトノ由ニ候乃チ平和會議ニ於テ支那ノ發言主張スペキ条件トシテ
- (一) 青島問題 主權ハ帰還サルベシ
- (二) 山東鐵道権問題 主權ハ帰還サルベシ
- (三) 滿洲鐵道問題 主權ハ帰還サルベシ
- (四) 領事裁判権問題 完全ニ撤廃スペシ
- (五) 關稅問題 對等徵稅
- (六) 各國ノ支那駐兵ハ完全ニ撤退スベシ
- (七) 蒙古西藏ノ如キ境土内一切ノ施設行政ハ完全自由タルベシ
- (八) 勢力範囲ノ廢除
- (九) 各處ノ鉄道ハ支那ニテ完全ニ自由運營スルヲ得ベシ
- (十) 一切ノ租借地ハ日本制ニ徴ヒ居留地ニ改ム
- 右ノ各項ヲ掲ケ輿論ヲ鼓吹セント勉メツツアルヲ見ル又米國系北京唯一ノ漢字新聞益世報ハ十一月十四日ノ社論ニ「平和會議ト東亞問題」ト題スル論説ヲ掲ケ先ツ「ウキルソン」氏ノ十四ヶ条声言三大主義ヲ提倡鼓吹シタル後此度ノ平和會議ニ列席スル各國ノ代表者ハ機警靈敏ノ外交家ヨ
- ヲ保シカタキハ勿論ニ有之候天津ニ閑居中ノ例ノ梁啓超ハ
- トテ極端ニ支那ヲ煽動スルアリ他日若シ支那カ平和會議ニ一席ヲ占ムルニ至ラハ或ハ非分ノ希望主張ヲ提出スルナキ

ルコトヲ聞キ欣悦極ナシ是ニヨリ公理ト自由トハ顯明スルヲ得我カ協商國ノ軍隊ハ已ニ最後ノ勝利ヲ得タリ本大總統ハ特ニ本国政府及ヒ國民ヲ代表シ敬シテ誠摯ノ意ヲ以テ貴皇帝ニ向ヒ賀意ヲ表達ス尚平和會議ハ不日召集セラレベク我カ両國ノ代表者カ共同シテ自由公理並ニ世界ノ公道ヲ維持スルヲ得シハ此レ即チ本大總統ノ深ク信シテ疑ハサルモノナリ

ト又同日別ニ仏國、葡國、伯刺西爾、白耳義ニ宛タル親電左ノ如シ

大仏蒲伯國君主陛下茲ニ獨逸カ休戰條約ノ訂立ヲ請フニ際シ本大總統ハ敬シテ誠摯ノ意ヲ以テ貴皇帝ニ及ヒ貴國ノ高尚敢毅ナル國民ニ向ヒ賀意ヲ表ス此レ公理人道最後ノ勝利ナリ不日我カ平和會議ハ開カルベク仍チ當ニ公理人道ニ本ツキ我カ両國代表カ親密ヲ以テ援助スルヲ得ルハ尤モ本大總統ノ欣ヒ觀ントスル所ノ者ナリ

将来平和會議ニ一席ヲ占メ其支那問題ニ關シ何等カノ發言權ヲ有セントハ支那國民唯一ノ希望ニシテ右各電報ノ分別措詞ノ間自ラ其情偽ノ流露シアルヲ見ル現ニ山東省民ノ一部遊説政客ハ休戰條約締結ノ報ト共ニ大要左ノ如キ建白請

十四日ノ国民公報及惟一日報ニ自ラ署名シタル「平和會議ニ列席ヲ請求セんカ為メ我カ友邦ニ敬告ス」トノ一大長篇ヲ掲ケ先ツ近ク道路ノ伝説ニ依レハ支那ハ内乱未タ定マラス且ツ參戰義務ヲ円満ニ履行セサル為メ平和會議ニ出席スルヲ許ササルベシトノ虚伝ナランコトヲ切望シ懇切反復支那ノ立場ヲ弁明シ且ツ列席ノ理由ト権利アルコトヲ主張シテ友邦ノ厚意アル考慮ヲ促シタル後万々一支那若シ平和會議ニ列席スルヲ得スンバ其支那問題ニ対スル如何ナル決議モ之ヲ承認スルヲ得ス又如何ナル義務負担モ絶対ニ履行セサルベシト宣言スルノ外ナキヲ繰返シ居レリ其他國務院僑工事務局カ仏國方面ニ支那苦役十五万五千余人ヲ供給シタル事實ヲ鼓吹シ其他右ニ関スル報告統計ヲ勿卒ニ発表スル等併セテ支那官民希望ノ存スル處其用意推知スペキニ候又段祺瑞直系ノ民視報新民報是報等ハ十四日ノ紙上或ハ段合肥外交ノ榮譽或ハ合肥對外政策ノ全功ト題シ同文ノ記述ヲ掲ケ段カ昨年毅然トシテ協商側ニ参加シ対独宣戰ヲ決スルニ至リタルヲ称揚スルハ或ハ之ヲ諒トスベキモ其浦塙出兵乃至仏國ヘ苦役供給ノ事実等ヲ極メテ誇大ニ吹聴シテ人道自由ヲ擁護センカ為メ毅然トシテ參戰ヲ實行シタリナト

尚又茲ニ附記報告スペキハ「ケットル」紀念石牌樓破壊ノ一事ニ有之候狂喜熱狂セル仏米兵及同国人ノ一團ハ十二日夜先ツ獨逸公使館門前ノ石獅ヲ引倒シ此ニ乘シ北京東單牌樓北方（公使館区域外）ニ在ル「ケットル」紀念石牌樓破壊ニ從事シタルモ果サス翌十三日白昼重ネテ之ヲ行ヒ全部遂行スルニ至ラサル内支那側ハ熱狂ノ余リ此事ニ出タリトスルモ而モ完全ナル支那ノ地域ニ於テ此行動アルハ解スベカラズトノ抗議ヲ仏國公使ニ提出シタル結果破壊ハ支那側ニ於テ行フベシトノ事ト相成リ十四日ヨリ支那側ヨリ人夫石工ヲ雇ヒ取毀ニ從事致居候

抑モ此石牌樓ハ義和團匪徒ニ殺害セラレタル前獨逸公使「ケットル」男ヲ紀念スベク支那側ニテ謝罪的ニ建造シタルモノ乃チ千九百年十二月二十一日ノ十一ヶ国公使カ連署將又熱狂セル米仏國兵（重ニ安南兵ナリトモ云フ）等ノ一团カ十三日夜公使館区域内ニアル独亞銀行ニ火ヲ放チ（焼失ニ至ラス消止メラル）屋内ニ侵入シ器具裝飾ヲ破壊シ其他公使館区域内ニ在ル独逸人ノ店舗ヲ襲ヒ破壞ヲ敢テンタルカ如キハ天津ニ於ケル是等ノ暴挙ト同シク自ラ之レ狂喜熱烈ノ余ニ出ツトハ言ヘ是迄四ヶ年間隱忍自重シテ敢テ狂亂スルヲ得サリシ京津在住米仏等文明国人ノ体度トシテハ是亦非難スルモノ尠カラサル模様ニ有之候

シタル連名公書ノ第一条同シク千九百一年九月七日十一ヶ国公使ト支那全權トノ間ニ調印シタル最終議定書第一条ノ規定ニヨリ建設セラレタルモノニシテ支那側ヨリセハ一種ノ國辱紀念、罪惡表彰品ナリ昨年支那カ對獨宣戰ノ初メ一部士人間ニハ此石牌樓ヲ取除クベシトノ主張モアリタルカ当事支那當局ハ一ハ列國ト條約上ノ關係及ヒ独逸勢力興復ノ曉ヲ顧慮シ何等毅然タル行動ニ出ツル能ハサリシカ今回偶然ノ行掛ヨリ取毀サルノ運ト相成候但シ熱狂ノ余ニ出ツトハ言ヘ米仏國兵等カ列國共同調印ノ權利利益ヲ有スル條約ノ或ル事項ヲ破棄スルニ至リタル責任ニ就イテハ猶充分研究ノ余地アルモノト認メラレ候

右及報告候

五一二 十一月十七日 在米國石井大臣宛（ヨリ）

中国ノ門戸開放及中國ノ參戰態度ニ対スル警告ニ關スル對日誹謗論說及新聞記事報告ノ件

第七二一八号

元紐育 Far-Eastern Bureau 主任 Gallagher ハ過日「ノパブリックレッジヤー」紙上ニ日支秘密借款ト題スル長文ノ論說ヲ公ケニシ各種借款ノ要領ヲ記述シ且「ノース、チヤイナ、デーリー、ニュース」ガ右ハ日支交渉第五項ノ復活ナリト攻撃セル社説ヲ援用シ支那ハ速ニ政府ヲ確立シ如何ハシキ借款ヲ取消シ聯合國協同ノ借款ニ依ル方針ヲ執ラサルヘカラス米英仏ハ決シテ支那ノ門戸閉鎖ヲ看過セサルヘシト論シ右ハ「ワシントンポスト」ニモ転載セラレタルカ同人ハ十六日ノ同紙上ニ更ニ前大統領「タフト」カ講和全權委員ノ一人タルヘシトノ報道ヲ前提トシ同氏ノ如キ極東通カ講和會議ニ臨ミ支那ヲ助ケ其門戸開放主義ヲ擁護スルコト希望ニ耐ヘス米國ハ戰後其船舶ヲ利用シ對貿易ノ發展ヲ計ルコト急務ナルニ顧ミ本件ハ米國ニ取り頗ル重要

言フニ至リテハ聊カ人ヲシテ顰笑ヲ禁セシメサル者アルヲ覓エ且ツ全然罪ヲ旧国会ニ嫁シ旧国会カ參戰案ヲ通過セサルカ為メ解散ノ已ムナキニ至リ遂ニ内乱ヲ釀シ今ヤ新国会如キ今日南北妥協統一ニ進ミツツアル際却テ輕卒不謹慎ノ譲ヲ免レサルモノト評スルモノモ有之候

一六 パリ講和会議準備一件 五一三

六三四

ナル事柄ナリト論述セリ

將又、最近ノ Christian Science Monitor 華府通信トシテ先般在支聯合使臣ヨリ支那政府ニ与ヘタル參戰態度ニ関スル警告ナルモノハ其実日本ガ聯合國使臣ヲ欺キ殊ニ講和會議ヲ見越シ米国ニ向ヒテ支那ヲ讒訴セントノ画策ニ出テタルモノナリトテ、支那ガ決シテ參戰ニ不熱心ナラサリシ次第ヲ詳記シタル記事掲載セラレタリ、Gallagher ノ分ハ兎モ角 Monitor ノ通信ハ同通信員ガ平素在米支那公使ト懇意ナル關係ニ顧ミ、或ハ支那側ヨリ出テタルニ非スヤト疑ハルヘキ節アルニ付、講和會議ノ切迫ト共ニ米国ニ対スル支那ノ態度注意ヲ要スル折柄御参考迄ニ電報ス、前記諸記事ニ対シテハ適當ノ方法ニ依リ弁明ノ措置ヲ執ル可シ

五一三 十一月二十一日 在英國珍田大使（ヨリ内田外務大臣宛）（電報）

講和會議二対スル委員ノ人選ニ関シ進言ノ件

第一〇三三号（至急極秘）

帝国政府ニ於テハ英仏駐箚大使ヲ以テ講和會議委員ニ任命スルコトニ内定シタル趣ノ電報頃日來當地新聞紙ニ再応登載セラレタル處右ハ勿論半解半知ノ報道ニ止リ往電第九八

○号電票ノ件ハ目下折角御詮議中ノ儀ト存セラルモ右様ノ訛伝ニ顧ミ此際成ル可ク速ニ本件御決定公表相成方得策ト思考ス卑見ヲ以テスレバ講和會議ニ於テ列強間ノ權衡ヲ保チ帝國ノ威望ヲ将来ニ維持センガ為内閣總理大臣又ハ外務大臣ニ於テ自ラ此重任ニ當リ帝国ヲ代表スルコト最適當ト認ムルモ（當國新聞ノ予想ニ依ルモ聯合側各國講和委員ノ顔触中ニハ概々首相及外相ヲ含メ居レリ）若シ地理的關係ヨリ到底其實行ヲ許ササル場合ニハ閣外重望家中ヨリ成ル可ク速ニ特派大使ヲ御選任相成度切望ニ堪ヘズ尚其簡抜ニ関シ當方面ノ事情ニ鑑ミ卑見ヲ披瀝セバ（第一）出來得ル限り軍人以外ノ政治家ニ此使命ヲ委任スルコト折衝上頗ル有利ナルベキヲ信ズ但シ隨員又ハ専門委員ノ此限リニアラサルハ勿論ノ儀ナリ（第二）万一我特使ニ於テ独逸崇拜ノ評判ヲ荷フガ如キハ、其任務遂行上殆ト致命的負傷ナルキハ問題ニアラズ qui s'excuse s'accuse ノ不利ナル地位ニ立ツカ如キハ極力之ヲ避クルノ必要アルヲ認ム当方面現下ノ事情ニ照シテ平和会場ニ於ケル将来ノ空氣ヲトルストキハ叙上ノ二点ニ対スル注意ハ此際極メテ緊要ナリト愚

考ノ儘敢テ越俎ノ罪ヲ冒シ茲ニ謹デ卑見ヲ進言ス

五一四 十一月二十二日 開議決定

中国政府ノ講和會議提出条件ニ関スル新聞電
報記事ノ真偽査報方訓令ノ件

第一〇八四号

貴地發新聞電報ニヨレハ陸外交總長ノ齋スヘキ講和會議提出条件中ニハ領事裁判権ノ撤廃、關稅改正、青島及山東鐵道回収、東清鐵道ノ處理、各國ノ駐屯軍ノ撤去、蒙古西藏ノ開放等ノ諸件ヲ含ミ居リ又山東省選出衆議院議員等ハ同院ニ對シ膠州灣租借地其他山東省ニ於ケル獨逸ノ權利ヲ回收スヘシトノ建議案ヲ提出シタリトノ趣ナル處右事實ノ真相止メ回電アリタシ

五一六 十一月二十五日 在濟南吉田領事（ヨリ内田外務大臣宛）（電報）

濟南方面人士ノ青島還附要求ノ動キニ関シ報

告ノ件

第一七八号

「上記交換公文ノ次第ハ大正四年五月中英米仏露各國政府
〈通告済〉

然日支兩國間ノ關係ニ限り処理セラルヘキモノナルハ明確ニ諒解セシムルコトヲ要ス
スハ帝國政府ノ承認スルコト能ハサル所ニシテ本問題力全行ヲ以テ独逸國ヨリ帝國ニ対スル該租借地讓渡ノ条件トナ

兎モ角 Monitor ノ通信ハ同通信員ガ平素在米支那公使ト懇意ナル關係ニ顧ミ、或ハ支那側ヨリ出テタルニ非スヤト疑ハルヘキ節アルニ付、講和會議ノ切迫ト共ニ米国ニ対スル支那ノ態度注意ヲ要スル折柄御参考迄ニ電報ス、前記諸記事ニ対シテハ適當ノ方法ニ依リ弁明ノ措置ヲ執ル可シ

（附 簿）

五一五 十一月二十三日 内田外務大臣（ヨリ内田外務大臣宛）（電報）

一六 パリ講和會議準備一件 五一四 五一五 五一六

六三五

一六 パリ講和会議準備一件 五一七

右平和会議提出条件

六三六

シ居ルノ一面有志ハ省議会ニ対シ支那參戰ニ依ルノ損害ハ
青島還附ニ依テ其代価トス可ク青島還附ノ代償ハ日本ハ之
ヲ独逸ニ求ム可シトノ都合ヨキ請願ヲナシ又省議会ハ中央
政府及両議院ハ講和会議ニ山東問題ヲ提出シテ所期ノ解決
ニ力メンコトヲ電請シ山東議員王納（嘗テ民政問題ニ付強
硬ノ論議セルモノ）等ハ右同様ノ趣意ニテ省議院ニ建議ス
ル処アリタリ此際輿論ヲ喚起シテ支那政府ニ迫ル所アルト
共ニ其後援トナリテ山東諸案件ノ有利ナル解決ヲ見ント欲
スルコト有志者ノ趣意トスル所ナルガ如シ然レトモ我青島
還附ノ帝国政府ノ声明アリ我輿論ハ区々ナルモ新聞紙上還
附ヲ説ク論者散見スルヲ以テ当地官民ハ内心多少我真意ニ
付疑ヲ入レツツモ敢テ激越ノ調ヲ以テ未タ本件ヲ論議スル
モノナン

五一七 十一月二十五日 在中国林公使ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

國務會議ニ於テ内定ノ中國ノ平和会議提出条

件二付陸外交總長談話ノ件

別電 同日在中國林公使發内田外務大臣宛電報

第一六三四号

別電 同日在中國林公使發内田外務大臣宛電報

十一月二十五日在中国林公使發内田外務大臣宛電報第一六

三四号
中国ノ平和会議提出条件
第一六三四号（別電）

一 支那獨撲間通商條約及千九百年議定書中獨撲ニ關スル
部分ハ獨撲ト開戦ノ結果全部破棄セラレタルコトヲ宣布ス
ルコト
二 獨撲ト開戦ノ結果被リタル損害ノ賠償其他ノ要求事項
ニ関シテハ支那ハ与國ノ主張ニ贊同ノ意ヲ表スルコト（但
シ支那トシテハ賠償等ヲ要求スルノ意ナシ）
三 将來獨撲ト新ニ條約ヲ締結スル場合ハ對等ノ標準ヲ取
ルコト

五一八 十一月二十六日 在中國林公使ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

講和會議ニ於ケル中國側ノ過當ノ権利要求ハ

不得策ナル旨梁啓超ニ警告ノ件

第一六四〇号
十一月二十五日梁啓超本使ヲ來訪シ語ル処ニヨレハ同人ハ
近ク個人ノ資格ニテ歐洲視察ノ途ニ上ルヘク專ラ戰後ニ於
ケル社會ノ狀態及新旧文明ノ思潮等ヲ比較研究シ併セテ講

一六 パリ講和會議準備一件 五一八 五一九

第一六三三号

貴電第一〇八四号ニ閔シ十一月二十五日陸外交總長本使來

訪ノ際問糺シタル處國務會議ノ結果來ルヘキ平和會議ニ向
ヒ支那ヨリ提出スヘキ条件トシテ差当リ別電第一六三四号
ノ通リ内定セリ右ニ閔シテハ今回渡欧ノ途次東京ニ立寄リ
貴國當局者トモ篤ト打合ヲ遂ケタキ所存ナリ新聞紙上領事
裁判權ノ撤廃、關稅改正、青島及山東鐵道回収等種々羅列
シアルモ右ハ全然議員連ノ注文ニ過キズ未タ政府ノ考量ニ
上リタルコトナシ将来万一右ノ如キ問題ヲモ提出スル場合
アリトスルモ其際ハ予メ關係諸國ト十分打合ヲ遂ケタル上
ナラデハ何等ノ措置ニ出ヅル能ハサルハ申ス迄モナキ事柄
ナリ尚差當リ支那政府ヨリ派遣スル平和會議參列特派全權
委員ハ自分（陸）、胡惟德、施肇基ノ三人ナリ在米顧公使
及既ニ先発セル魏辰組兩人ハ特別委員トシテ參列スルコト
トナルヤ或ハ全權委員ノ名義ニテ參列スルヤハ今後ノ模様
次第ニテ決スル筈ナリト答ヘタリ

（別電）
十一月二十五日在中国林公使發内田外務大臣宛電報第一六

五十九 十一月二十七日 在英國珍田、在仏國松井各大使宛
(電報)

講和會議全權委員ニ任命内定ヲ通報ノ件
第六五四号（英國宛）

第一七四号（仏國宛）

六三七

一六 パリ講和会議準備一件 五二〇

帝国政府ハ今回講和全権委員トシテ貴官並（英ヘハ松井）

（仏ヘハ珍田）大使ヲ任命スルコトニ内定シ尚右ノ外同シ
ク全権委員トシテ両園寺侯及牧野男ノ出張ヲ求ムルコトニ

決定シタルガ西園寺侯ハ健康上直チニ出張スルコト不可能
ナルモ牧野男ハ外務及陸海軍ヨリ派遣員モ同伴來月初旬先

發スペシ尚列国何レモ未タ全権委員ノ正式任命ナキニ顧ミ
我国ニ於テモ正式ノ任命ハ他日ノ事トナルベシ尚全権隨員
ノ氏名等ハ追電スヘシ

右御含迄

（英ヘハ）在米伊大使ヘ転電アリタシ仏ヘハ電報済

（仏ヘハ）英米伊ヘ電報済ノ旨附記スルコト

五二〇 十一月二十九日 在中国林公使（ヨリ）

内田外務大臣宛

中国ニ於ケル日本ノ行動ニ対スル連合國側ノ

不満ニ関スル新聞記事報告ノ件

附屬書 十一月二十七日付北京デイリー、ニューオー

ス切抜

右新聞記事

機密第四六一號

（十一月五日接受）

府ニテ取調中ノ「クローフオード」ニ閲スル件等ヲ指スモノト思ハル）其他日本出兵等ニ関連シ聯合國人民ニ対シ在

滿日本官憲ノ執リタル処置等亦甚タ感服シ難キモノアリタルコト（斯カル不満ノ眼ヲ以テ見ルトキハ些細ノ事モ気ニ懸リテ休戦成立ニ對シ日本側歡喜ノ状一向ニ顯レ居ラサル

カ如キコトモ亦聯合國人民ノ不快ヲ買ヒツツアルコト等ハ其主タルモノナルヘシト報シ最後ニ右ハ何等批評的精神ヲ以テ記述シタルモノニ非ス只各國ノ國民的傾向カ支那ニ於ケル聯合國間ノ關係ニ反映シタル一ノ現象トシテ之ヲ掲ケタルナリ右等対日不満ノ原因ヲ為セル感想ノ正否ハ措イテ問ハサル所要ハ右ノ如キ感想カ現ニ存シ而シテ聯合國ノ日本ニ対スル不満ノ少クトモ一原因タルコトハ事実ナルノミト述ヘ居候

右ハ既ニ在上海總領事ヨリ報告済カトハ存候得共為念右記

事別紙切抜相添及報告候間委細別紙ニ就キ御承知相成度尚右通信ハ「チャイナプレス」及「ノース、チャイナ、スター」ノ北京通信員タル「ペキン、デイリー、ニュース」主筆「シェルドン、リッヂ」ノ筆ニ成ルモノニ有之同人ハ最近當館ヘモ常ニ出入シ我ニ對シ比較的の穩健ナル意見ヲ有シ

大正七年十一月二十九日

六三八

在支那

特命全権公使男爵 林 権助（印）

外務大臣子爵内田康哉殿

上海発刊「チャイナ、プレス」所載十一月十四日附同紙北京通信同二十七日北京「デイリー、ニュース」等ニ転載セラレ候處該通信ハ日本ノ支那ニ於ケル行動動モスレハ聯合國ノ利益ヲ阻害シ若クハ其利害ニ冷淡ナルカ如キモノアリ

タル結果今ヤ聯合國側ノ日本ニ対スル不満ハ其極ニ達シタリトノ趣旨ヲ述ヘ右不満ノ基ク所ハ種々アルヘキモ（）袁世凱カ參戰ヲ希望シタル際日本之ニ賛成セサリシコト（）所謂二十一ヶ条要求ニ依リ聯合國ノ日本ニ対スル信望失墜シタルコト（）日本ハ在支独逸公使ノ在天津日本總領事ニ対スル談話ヲ利用シテ独逸ノ利權ヲ繼承セムカ為英國政府ヲシテ之ニ都合良キ言質ヲ与ヘシメタリトノ感想一般ニ懷抱セラレ日本ノ真意ハ恐らく然ラサリンナラムモ右一般ノ感想ハ聯合側ノ対日感情ヲ更ニ悪化シタルハ事實ナルコト（）加之満洲ニ於ケル英國臣民ノ虐待（長春発本使宛四月十四日附公第六号公信所載「ペーソン」ニ閲スル件及目下關東都督

居リ且本件通信中ニモ自分ノ本旨ハ日本實際ノ立場ハ恐ラク之ト異ナルモノアラムモ兎ニ角一般ニ不満ノ存スルノ事実ハ否ム能ハサル所ナル旨ヲ明ニセムトスルニ在ル次第ヲ繰返シ記載シ居リ徒ニ日本ヲ攻撃セムトスルモノトモ認メラレス旁該通信列記ノ諸点個々ノ當否ハ扱置キ一般問題トシテ大ニ参考ニ資スヘキモノ有之候様被存候ニ付特ニ其趣旨ヲ以テ篤ト御查閱相成度此段申添候也

本信写送付先

中村關東都督

在奉天赤塚總領事

在長春山內領事

在哈爾賓山內總領事代理

（附屬書）

十一月二十七日付北京デイリー、ニュース切抜

中國ニ於ケル日本ノ行動ニ対スル連合國ノ不満ニ閲スル記事

Peking Daily News

November 27, 1918.

Allied Distrust of Japan's

Policy in China Comes

to Climax With

Friction is of Long Standing, Dating from Twenty-one Demands; Incident in Connection with Ching Hsing Mines Related.

("China Press" Correspondence.)

Peking, November 14.—In this correspondence a few days ago the fact was mentioned that there seemed to be a growing want of sympathy between Japan and the rest of the Allies, so far as questions concerning China, at any rate, are concerned. This lack of sympathy is not new.

Perhaps it may be said that the first real divergence between Japan and the rest of the Allies was seen when President Yuan would have had China throw in her lot with the Allies and declare war on Germany almost at the very beginning of the war. Had he been able to carry through this idea, the attack on Tsingtau, surpassingly glorious as it was—though rendered easier by the fact that the main portion of the German Asiatic squadron curiously enough managed to get out of the Kiaochow territorial waters after the Japanese blockade

The Twenty-one Demands were a very severe strain on Allied confidence; in fact for a time they were so severe a strain that confidence was broken, and that confidence has by no means been fully re-established. Ever since 1915 there has been an uneasy feeling with regard to Japan. Everything possible has been done to placate Japan, and the lengths to which the Allies were prepared to go, even so late as the spring of 1917, and the anxiety that existed even at that late date as to Japanese intentions, are just being revealed.

The revelation has come through the question of German interests in North China. For quite a long time Allied interests have been trying to secure control of the Ching Hsing coal mines. The bulk of the capital in these mines is Franco-Belgian, but the actual control has all along been German. The reason why certain Anglo-American interests have not been able to secure the property has now been revealed. It seems that just before China broke off diplomatic relations with Germany, the then German Minister, Admiral von Hintze, visited Tientsin and

in an interview with the Japanese Consul-General there he offered to the Japanese the reversion of all German interest in China, provided the Japanese would cease making munitions for the Allies. This offer was communicated to the British Secretary of State for Foreign Affairs, who regarded the communication as a "veiled threat" from Japan that if the reversion of all German interests in China were not secured to Japan the loyalty of Japan to the Allied cause might be doubtful. The British Secretary of State may have been entirely wrong in his interpretation; it is beyond question that Japan was simply, perhaps somewhat injudiciously, playing the part of little Jack Horner. However, the Secretary of State was sufficiently convinced of the soundness of his interpretation to act upon it, and he seems to have bargained for Japan's loyalty by saying that he was sure Great Britain would do quite as much for Japan in China as Germany was offering to do, which meant that the British Government would not stand in the way of Japanese acquirement of any German properties in China. America was just

began and also managed to escape the eternal vigilance of the Japanese navy right across the Pacific, only to inflict destruction on one British squadron and to be destroyed by another—would have been less so, for the Japanese would have been assisted not only by a handful of British troops, sent only for political reasons to take part in the operations, but by Chinese troops. Had President Yuan had his way China would have been in the war practically from the beginning. That this was not the case was entirely due to Japanese disapproval of the idea. This sowed the seed of antipathy.

Then came the Twenty-one Demands, in which Japan alienated a great deal of Allied confidence. Japanese action at Tsingtau and in Shantung has from the beginning given rise to general disapproval. The combining of the province for "cash," the establishment of a civil administration, the difficulties placed in the way of non-Japanese commerce, the huge trade in opium and its products, organised from Tsingtau, and other details of that kind, have only added to the difficulty.

coming into the war, and the final victory of the Allies had certainly never seemed so certain. Japan seems to have decided that the British Secretary of State's assurance, though only a verbal one, was, in the circumstances quite good enough. Consequently it has been impossible for non-Japanese Allied interests to secure the reversion of either the Ching Hsing mines or anything else. In this particular case it is *semi-officially* denied that the mines have passed to Japanese control.

Now, this whole interpretation of the Japanese attitude may be wrong; all that is intended here is to record the fact that it exists and that it accounts for a good deal of Allied distrust of Japan, or rather, it confirms that distrust very strongly indeed. Other incidents have given occasion for some raising of the eyebrows. Thus, the frequent ill-treatment of British subjects by Japanese in Manchuria, and the virtual impossibility of obtaining any sort of redress, the frequency of misunderstandings, some of them of a serious nature, between Japanese and other Allied nationals throughout Manchuria and in

connection with the Siberian expedition, and other things of that kind, added to the recent loan transactions between certain groups of Japanese who, though not officially recognised, seem to believe that their operations were not likely to be interrupted, have intensified the lack of sympathy.

Given the atmosphere of doubt, and almost any sort of misunderstanding becomes possible. Thus, it is a fact, that until this afternoon no Japanese institution has shown any marked signs of rejoicing over the armistice. Whilst all the other Allied institutions, such as legations, banks, clubs and the like, lost no time in decorating and illuminating themselves, hanging out flags, fixing electric lights, and so on, it is simply a plain statement of fact that through the whole length of the Hatamen, where there are Japanese hotels, and many Japanese shops, there were only two Japanese flags in evidence, until four o'clock to-day. The decoration of what may be regarded as the two principal Japanese institutions, the Japanese Legation and the Yoko-hama Specie Bank, suggests extremest economy.

The fact that a news agency has, in a telegram to Tientsin, called attention to the fact that the Japanese have not been prominent in the rejoicings has produced, literally, an electric effect and this afternoon the Japanese seemed to be entering more heartily into the spirit of these days. Against all these things, and the unsympathetic interpretation of them it is necessary to remember the fact that in Japan there is no such thing as spontaneous celebration of either joy or sorrow on a national scale. The police order all these things, and the fact that no police order had been issued to the Japanese in Peking to decorate and celebrate amply accounts for the absence of marked decorations or celebrations.

These things are recorded in no critical spirit; they are simply recorded as explanations of a certain phenomenon. The phenomenon of lack of sympathy between Japan and the rest of her Allies, so far as national relations are reflected in inter-Allied relations in China, undoubtedly exists. Why it exists, what are the circumstances that have brought

it into being, are recorded above. The accepted interpretation of these things may be all wrong; that is not then the point. The point is that this interpretation exists and that it is at least one of the origins of the undeniable lack of sympathy.

H111 + 1 田川十五 在上海有吉總領事

上傳即方中國人ノ親米黨ヲ米國係新聞雜誌ノ
卷田記事ニ譯ハ羅也ノ件

第171號

最近近地方支那人間ノ親米黨ノ趨向は甚々ヤハラ認メ得ハシ其ノ題「チャーハン・ラム」、「ハーバー・ラム」等米國係新聞雜誌ガ北京通信等ノ依リ盛ノハ排口ノ記事ヲ掲クルハ注意ニ値シ右ハ若干組織系統アル運動ニアラベヤトヤ推察セハルル節アリ「ハーバー・ラム」ハ如キ米國政府ノ補助金ニ成ニリ等ノ説ヤ強チ無根トモ認メ難キカ如ク現大統領ノ「ハーバー・ラム」ハ当地方ヲ漫遊セバ「クノーハ」ハ如キ務メテ各方面ノ支那人ハ接觸シ所々ハ集会等ノ演説ヲ試ミ米國熱特ニ「ハーバー」崇拜熱ハ鼓吹セル迄11十八日夕商務總會ノ纏

宴ニ於ケル其ノ最後ノ演説ノ末節ニハ「今ヤ支那ハ過去ニ於テ他国ニ依リ奪去ラレタル権利ヲ奪回スヘキ時機ニシテ宜シク有力ナル使節ヲ派遣スヘシ」ト云ヒ更ニ「同使節ハ

同盟国ニ対シ十分ニ其ノ状況及其ノ被リタル不正ヲ知悉セシムルニ恐ラ懷クヲ要セス何トナレハ平和会議ニ於テハ世界ノ問題が討議且決定セラルヘキモノナレハナリ」等ノ語

アルカ如キ甚タ注意ニ值スルモノト認メラレ尚米國側ニ於テハ最近「インフォーメーション、ビューロー」ヲ「ミラード、レビューア」社内ニ設ケ「チャイナ、アンド、ジャパン」ノ著者（日本及日英同盟ヲ攻撃シタルモノニシテ英國ニ於テ販売禁止セラレタルモノ）Carl Crow ヲ主任トシ無料ニテ各新聞社等ニ通信ヲ配布ラナシ居リ右ハ總領事館ノ経営ニ係ルモノナリトノコトナリ將又「トーマス、エフ、ミラード」ハ本日発日本ニ赴キ「クレーン」ト会シ和平會議ニ赴ク筈ナリト伝ヘラル

公使ヘ転電セリ

五二二 十二月一日 在中國公使ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

中国ニ於ケル外国ノ勢力範囲撤廃問題講和会

議ニ提出セラルル場合ノ我方ノ態度ニ関シ意見稟申ノ件

第一六六四号

十一月三十日芳沢ハ梁啓超ト会見ノ際梁ハ今回渡欧ノコト

トナリタルニ就テハ出発ニ先チ聯合側各国代表者其他ノ向トモ会見意見ノ交換ヲモ試ミタルカ其内今次ノ平和會議ニ

於テハ極東問題モ種々論議セラルヘク右ノ内支那ニ於ケル

外國ノ勢力範囲裁撤ノ義モ或ハ提出セラルルコトナキヲ保シ難カルヘシトノロ吻ヲ漏セル向モアリタル処果シテ該問

題ニシテ提議セラルルカ如キコトアル場合ニ於テ日本ハ如何ナル態度ニ出ラルヘキヤト推問シタルニ付芳沢ハ右様ノ

場合ニ於テ日本ノ執ルヘキ態度如何等ニ就テハ自分ニ於テ勿論承知セサルモ全然一己ノ私見ニ依レハ勢力範囲裁撤事

態ハ主義上結構ナル儀ト思料セラルル處之ヲ実行スルヤ否ヤヲ決スルニ先チ先以テ支那自ラ積弊ノ改革ヲ断行スルノ

必要アルヘキ旨答へ置キタル趣ナルカ右梁ノ談話ニ関連シ

テ端ナクモ想到セラルルハ客年五月米國公使及紐育日本協

会会頭「ラッセル」カ本使ニ對シ支那ニ對スル日本ノ方針

宣明方ヲ懇意シ進ンテ列強ヲシテ機會均等自由競争公平ノ

主義ニ於テ行動セシムルコト可ナルヘキヲ提議セルコトニ之アリ右ハ客年往電第六〇三号ニテ委細御了悉ノ通ナルカ其根本ノ趣旨ハ要スルニ勢力範囲裁撤等ヲ期セントスルニ外ナラサル處右米國側ノ主張ニ對シテハ當時英仏両国代表者ニ於テハ余リ賛成ノ態度ヲ表セサリシ次第ニモ之アリ今

日尚梁啓超ニ對シ上述ノ如キ談話ヲ為シタルモノアリトセカト思考ス

ハ多分米國側ヨリ出タルモノナルヘクト察セラル蓋シ當時「ラッセル」ノ提案ハ我方ニ於テ特殊ノ利益ヲ有スル滿洲ハ之ヲ除外セサルヘカラストノ趣旨ナルカ故（石井「ランシング」協定ノ実現セラレタルモ或ハ右米國公使「ラッセル」等ノ計画ニ胚胎セルモノニアラサルカト想察セラル）本勢力範囲裁撤ノ為メ直接ノ影響ヲ蒙ルハ英、仏、白耳義等ニシテ（山東ハ何レノ途支那ニ還附セサルヘカラサル故）日本ハ從來英仏等ノ特殊ノ利益ヲ有シタル地域ニモ閔係ヲ付ケ得ヘキヲ以テ寧ロ利益スルコトトナルヘキヤニ思料セラル尤モ該問題カ果シテ平和會議ニ提議セラルヘキヤハ不明ナルノミナラス万一提議セラルルトスルモ果シテ其成立ヲ見ルヘキヤ否ヤ勿論疑問ナルモ若シ提議セラルルカ如キ形勢之アルニ於テハ寧ロ我方ヨリ進ンテ之ヲ提議

料セラルニテノミナラス萬一提議セラルルトスルモ果シテ其成立ヲ見ルヘキヤ否ヤ勿論疑問ナルモ若シ提議セラルルカ如キ形勢之アルニ於テハ寧ロ我方ヨリ進ンテ之ヲ提議

一六 パリ講和會議準備一件 五二三 五二四

宜供与方御手配ヲ煩シ度殊ニ梁ニハ出来得ヘクハ特別室ヲ供セラル様然ルヘク御配慮相成タシ

五二三 十二月二日 在中国林公使ヨリ

内田外務大臣宛（電報）

「ミラード」ノ渡欧後ノ任務ニ関スル情報報

告ノ件

第一六八〇号

往電第一六六〇号^(註)ニ関シ十二月一日北京「デーリー・ニュース」主筆「リッジ」ハ徳川ニ対シ「ミラード」ハ排日的ナ

ルノミナラス甚シク anti-Allied ニテ支那ノ為メニ計ルモ亦聯合國ノ為メニモ同人ハ此種ノ任務ニハ最後ニ推挙セラル可キ人物ト信ズルモ乍遺憾該報道ハ事実ナルモノノ如シト述べ又「ホッジエス」ハ自分モ懇意ナルカ「ミラード」ト事ヲ共ニス可シトハ思ハレス同人ニ関スル報道ハ多分何等カノ間違ナラント信スル旨語リタル趣ナリ（「ホッジエス」ハ三十日発哈爾賓及日本ニ向ヒタルガ其前旅券査証ヲ受クル為メ當館ニ来リタル際岸田ニ対シ東京ニハ暫時滞在ノ心算ニテ後藤男ニモ面識アルニ付訪問スル積リナリ

ト語リタル趣ナリ御含迄ニ申添フ）將又路透通信員「ワード」ト事ヲ共ニス可シトハ思ハレス同人ニ関スル報道ハ多分何等カノ間違ナラント信スル旨語リタル趣ナリ（「ホッジエス」ハ三十日発哈爾賓及日本ニ向ヒタルガ其前旅券査証ヲ受クル為メ當館ニ来リタル際岸田ニ対シ東京ニハ暫時滞在ノ心算ニテ後藤男ニモ面識アルニ付訪問スル積リナリ

往電第一六八〇号ニ関シ

五二四 十二月三日 在中国林公使ヨリ

内田外務大臣宛（電報）

中國講和使節ト「ミラード」トノ関係ニ關シ

路透通信員内話ノ件

第一六九〇号

往電第一六八〇号ニ関シ

五二五 十二月四日 在中国松井大使宛（電報）

講和事務ノ為牧野男爵以下二十名歐洲出張ノ件

旨通報ノ件

第一七九号

トナリタル趣ナルニ付今回「ミラード」ノ使命ハ同公使ノ人ヲ加フルコトハ面白カラサル旨回訓ニ接シ右ハ沙汰止ミ
関知セサル所ナルヘク多分「ミラード」ニ先頃「クレーン」^(註)在京ノ節同人ト密接ナル關係アリシ所ヨリ自ラ來京シテ支那側トノ間ニ話合ヲ付ケタルニハアラサルカト思料セラル尚支那政府ヨリハ最初自分ニ対シ支那委員側ト新聞側トノ接触ヲ保ソニ適當ナル人物ノ物色ヲ依頼シ越シタルニ付自分ハ支那人中語学其他西洋ノ事情ニ通曉セルモノ尠力ラサルニ付此等ヲシテ之ニ当ラシムル方然ルヘキ旨ヲ答へ置キタルカ其後支那側ハ「ミラード」ト協議セシコトヲ承知シタルニ付人物物色ノ依頼ヲ断リタリト内話セリ上海ヘ

転電セリ

註 「グレーン」ニ就イテハ前出有吉總領事堯外務大臣宛第一七号電報參照

六四六

ン」ノ船津ニ語ル所ニ依レバ其後支那政府筋ニテ「ミラード」ハ陸総長一行ト何等關係ナシト云ヒ居ルモ「ミ」ガ陸ト前後シテ渡航スルハ事実ナリ彼ハ多分表面「ミラード、レビューア」主筆通信員ヲ標榜スルナランモ彼現下ノ境遇ニテ渡欧ノ費用ヲ自弁スル能ハザルハ明ナレバ必ズヤ何レカ

ノ方面ヨリ相当補助ヲ受クル事トナリ居ルハ想像ニ難カラス從テ彼ハ支那ノ為メニ英米仏方面ニ於ケル新聞操縦ノ任ニ当ルナラント信セラル節アリトノコトナリ
往電第一六六〇号ト共ニ上海ヘ転電セリ
註 林公使來電第一六六〇号省略セルガ該電ハ上海「ミラード、レビューア」主筆「ミラード」ガ講和會議中國使節ニ附属スペキ「パブリシチー、ビュロー」ノ主幹ニ又「ゼンクス博士ノ事業ヲ助ケ居タル米国人 Hodges ハ該局員ニ任命セラレタリトノ情報ヲ報告セルモノナリ

往電第一六六〇号ニ關シ

五二六 十二月五日 在英國珍田大使宛（電報）

中國講和使節ト「ミラード」トノ関係ニ關シ

路透通信員内話ノ件

第一六九〇号

往電第一六八〇号ニ關シ

五二七 十二月四日 在英國松井大使宛（電報）

講和事務ノ為牧野男爵以下二十名歐洲出張ノ件

旨通報ノ件

第一七九号

講和事務ノ為牧野男爵以下二十名三日付ヲ以テ歐洲出張仰付ラル一行ハ十日天洋丸ニテ横浜発米國經由明年一月四日以後紐育發ノ英國行最近便船ニテ渡欧ノ筈其氏名ハ外務省ヨリ松岡、佐分利、吉田（茂）、木村各書記官、有田、重光各外務省事務官、嘱託立博士、陸軍ヨリ奈良中將、二宮、畠（俊六）各中佐、藤岡大尉、海軍ヨリ竹下中將、山川參官、野村、山本各大佐、及ビ実業家ヨリ近藤廉平、深井英五、福井菊三郎、喜多又藏ナリ、西園寺侯ノ出発ハ多少遲延スヘシ右在英大使及在蘭公使ヘ転電アレ

第六六九号 極秘

青島處分問題ニ關スル日本政府ノ方針通報等

一六 パリ講和会議準備一件 五二七

六四八

貴電第九八一号後段青島処分問題ニ関スル帝国政府ノ方針
左記ノ通り決定シタルニ付右御含アリタシ

(一) 独逸政府トノ協定ニ依リ膠州湾租借地ノ自由処分権ヲ獲
得スルニ至ラハ大正四年ノ日支交換公文ノ事項ヲ遵行シ之
ヲ支那ニ還附スルコト

(二) 仍テ適當ノ機会ニ於テ進テ英米仏伊等ノ諸国ニ右ノ決意
ヲ説明シ我公正ノ態度ヲ表明スルコト

(三) 陸外交總長來朝ノ機会ニ於テ支那ニ対シテモ右ノ決意ヲ
内示シ我公正ノ態度ヲ了解セシメ延イテ講和會議ニ於テ日
支両國ノ歩調ヲ一ナラシムル様措置スルコト

四将又膠州湾遠附ノ實行ヲ獨逸ノ帝国ニ對スル該租借地讓
渡ノ条件トナスカ如キハ素ヨリ承認スルコト能ハサル所ニ
シテ本問題カ全然日支両國間ノ關係ニ限り處理セラルヘキ
モノナルハ明確ニ諒解セシムルコト

尚貴電第一〇二九号青島及南洋諸島処分問題ニ關シ米國ト
了解ヲ遂クルノ件篤ト考量ヲ加ヘタル処現ニ英國カ其ノ講
和条件トシテ提出スヘキコトト信セラル赤道以南獨領諸
島割讓問題ニ付テモ未タ米國政府ニ協議ヲ了スルニ至ラサ
ルモノノ如ク此ノ際帝国政府ヨリ右処分問題ヲ米國政府ニ

開談スルモ同政府ニ於テハ或ハ言質ヲ与フルコトヲ避クヘ
キ虞アルノミナラス目下西比利亜問題ニ関シ同政府ハ帝国
ノ行動ニ疑惑ヲ抱クノ状アルニ顧ミ今暫ク開談ヲ見合ハシ
追テ英國政府ト歩調ヲ一ニシテ本件ヲ提案スル方安全ナル
ヘシト思考ス尤モ貴電第九八一号後段御申出ノ如ク英國政
府ヲシテ為念更ニ之ヲ確認セシメ置クコトハ此際有利ト認
メラルルニ付右ニ関シテハ貴官ニ於テ然ルヘク御措弁相成
様致シタシ

右在歐米各大使ニ転電アリタシ

註 珍田大使案内田大臣宛電報第一〇二九号（十一月二十一日）

著電）ヨ省略セルガ該電ハ青島及獨領南洋諸島ノ処分問題
ニ付予メ米國ト了解ヲ遂ケ置カバ好都合ナルヘキ旨稟申セ
ル電報ナリ

五二七 十二月七日 在仏国松井大使^{ヨリ}
内田外務大臣宛（電報）

聯合國側ノ講和予備會議ニ我方ヨリ提出スベ
キ条件及同會議事務ニ從事スベキ人員ニ關シ

第六三四号

往電第六二二二号ノ通 Conférence Interalliée ノ期日未ダ

確定シ居ラサルモ在英大使発大臣宛第一〇九七号ノ二ノ次
第モアリ或ハ何時俄ニ開催ノコトトナリ牧野大使ノ一行ハ
或ハ其間ニ合ハサルヤモ計り難シ其際ニハ珍田大使及ビ本
使ニ於テ是ニ出席スルコト相成ル可キニ付

第一、同會議ニ於テ提出ス可キ我条件其理由説明等本使ノ
心得置ク可キ諸点至急電報アリタク（往電第五八八号御參
照）

第二、右ノ場合本使ハ毎次當館員ヲ同會議ニ帶同シ或ハ會
議ニ関スル事務ニ從事セシムル必要アルニ付テハ往電第六
一三号末段第五ニ關シ至急何分ノ御回電アリタシ
又當館附陸海軍武官ニ關シテモ何等何レヨリモ指令無キガ
是亦如何心得然ル可キヤ回電有リ度ク猶貴電第一七九号所
載以外ノ一行人名電報アリタシ

五一八 十二月九日 内田外務大臣^{ヨリ}
牧野男爵宛

講和會議全權ニ対シ其任務ニ關シ訓令ノ件

閣下等今次大命ヲ奉シ帝国ヲ代表シテ講和會議ニ参列セラ

レムトスルニ方リ本大臣ハ茲ニ帝国ノ講和条件並同會議ノ
討議ニ附セラルヘキ聯合与國ノ提案ニ關シ帝国政府意見ト

シテ今日迄廟議ノ決定セル所ヲ別紙開列シ閣下等行動ノ規
準ニ供セムトス尤モ別紙指示ノ各項中ニハ公然講和會議ニ
提案スルニ先チ与國ト意見交換ノ結果或ハ幾分取捨伸縮ノ
余地ヲ存スルヲ得策トスルモノモアルヘク此等ノ事項ハ追
テ帝国政府ノ意見未タ確定セサル案件ト共ニ更ニ考查審議
ヲ尽シタル上其ノ結果ヲ通報スヘシ

帝国政府ハ閣下等カ何レノ場合ニ於テモ絶エス英國其ノ他
聯合與國代表者ト緊密ナル接触ヲ保チ帝国大局ノ利益ニ反
セサル限り成ルヘク与國ト歩調ヲ一ニシ且常ニ公正穩健ノ
主義ニ遵拠シテ以テ帝国ノ威信ヲ發揚スルニ努メラルヘキ
ヲ期待ス

惟フニ講和會議ノ議事ニ上ルヘキ問題ニシテ我國家ノ運命
ニ深甚ナル影響ヲ及ホスヘキモノ尠カラス帝国政府ハ閣下
等ノ任務極メテ重大ナルヲ認識シニ閣下等ニ信頼シテ光

榮アル戰局ヲ收メムコトヲ冀フ

註 右文書ノ附属トシテ〔〕三大方針 〔〕ウイルソン十四箇条ニ
対スル意見 〔〕青島処分ニ關スル帝國政府ノ方針ノ三書類

添付セラレタリ右〔〕ノ三大方針ニ付テハ後出五三八文書

（十二月二十六日内田外務大臣発在英國珍田大使宛第七〇
二号）ノ別電一參看〔〕ノウイルソン十四箇条ニ対スル意見

一六 パリ講和會議準備一件 五二九

六五〇

ニ付テハ右五三八文書ノ附記參看(三)ノ青島處分ニ閔スル帝國政府ノ方針ハ前出十一月二十二日ノ閣議決定(五一四文書)ト同文ナリ尚右訓令ハ原内閣總理大臣ノ承認ヲ得タルモノナリ

(欄外註記)

「大正七年十二月九日夜佐分利書記官ニ手交スミ」

五二九 十二月十二日 内田外務大臣ヨリ
在中国芳沢臨時代理公使宛(電報)

陸外交總長來訪講和會議ノ議題タルベキ案件

會議ニ於ケル日中間ノ協力等ニ閔シ会談シタ

ルニ付通報ノ件

第一一四二号(極秘)

十二月九日陸徵祥ハ章公使及劉崇傑帶同來訪シ先ツ今回ノ講和會議ニ於テ充分日本政府委員ト協調ヲ遂ケタキ希望ヲ述ヘタルヲ以テ本大臣ハ全然同感ラ表シ日支ノ關係ハ近年益々緊密ヲ加ヘタルニ顧ミ兩國協調ノ必要更ニ切ナルヲ認ムル処幸ニ膠州灣租借地及山東省ニ於ケル獨逸利權ノ問題ニ付テハ既ニ日支兩國間ニ公文交換及意見交換ノ次第モ在リ帝国政府ハ右ノ趣旨ニ從ヒ誠実ニ之ヲ實行スル考ナルニ付支那モ亦誠実ニ條約及了解ノ趣旨通り実行アリ度ク從テ

タルハ之亦深謝スル所ナリト答ヘタルニヨリ本大臣ハ賠償金還附ノコトハ帝國政府ニ於テ主義上還附ノ内意アル旨ヲ通告シタルモノニシテ從テ其ノ時期方法条件等ハ更ニ講究ヲ要スル次第ナリ將又講和ニ閔シテハ西園寺侯牧野男トモ相談アランコトヲ望ムト云ヘルニ陸ハ青島無条件還附其他支那新聞紙上ニ現レ居リタル支那ノ講和条件ナルモノハ皆全然無根ナリ支那ハ參戰ハシタルモ実戰ニ參加シタル訳ニモ非ザルニ付講和會議ニ於テモ敢テ多クノ問題ヲ提出セん

トスルカ如キ意志ナシ支那ノ講和条件トシテ提出セントスルハ唯千九百一年義和團事件ニ閔スル條約ノ件ニシテ同條約ハ獨逸ノ「ワルデルゼー」カ各國軍ヲ率イテ北京ニ乗リ込ミ締結セシメタルモノナルカ故ニ支那ノ獨逸ヲ恨ムコト茲ニ年アリ尤モ獨逸ニ對シテハ參戰ト同時ニ之ヲ廢棄シタルモ戰後獨逸カ其復活ヲ要求スルカ如キコト無キ様列國ニ於テモ本條約ハ之ヲ茲ニ取消サレントヲ切望ス本條約ノ条項中尚残リ居ル問題ハ即チ(一)賠償金ノ支払(二)北京守備隊及北京海口間ノ交通保持ノ為ニスル各國軍隊ノ駐屯之ナリト述ヘタルニヨリ本大臣ハ賠償金ニ付テノ日本政府ノ意見ハ前述ノ通ニシテ又米國ハ曩ニ既ニ還附ノコトアリ結局殘ル所ハ英露等ノ問題トナル次第ナルカ本大臣ハ之等諸國モ日本等ト同様ノ意向トナランコトヲ希望スルモノナリ次ニ軍隊ノ件ハ貴國ノ安定如何ニヨルモノニシテ昨年ノ北京ニ於ケル張勦復辟其ノ他ノ政變又特ニ其後ニ於ケル南北ノ抗爭繼續スルカ如キ状況ニテハ各國ニ於テ撤兵ニ同意スルコト極メテ困難ナルヘシ此ノ点ヨリスルモ南北妥協ノ速ナランコトヲ望ム若シ統一セル政府成ラハ本件撤兵問題ノ如キモ一日モ速ニ解決センコトヲ希望スルモノナリト述ヘタリ尚

儀伍廷芳岑春煊陸榮廷唐繼堯ノ五人トノ間ニ直接ニ往復セル電報ヲ見タルカ右五人ハ孰レモ徐總統トハ同僚又ハ徐總統ノ世話ニ成リタル人士故必ス妥協ハ成立スヘシト答ヘ更ニ進テ講和会議ニ対スル帝国政府ノ考ヲ質問シタルニ付本大臣ハ日本ノ主要問題ハ膠州湾及山東ノ独逸利權ノ問題及南洋ノ獨領諸島ニシテ其他賠償金等ノ問題モ有ルヘキカ今回ノ講和会議ハ日支兩国否世界一般ニ亘ル大問題多々アリ例ヘハ「ウイルソン」氏ノ十四ヶ条特ニ國際聯盟ノ如キ之ニシテ是等ノ問題ニ付テモ支那ト歩調ヲ一ニスル必要多シト信スト述ヘタルニ陸ハ國際聯盟ノ如キモ如何ナル形ニヨリ成立スヘキヤ不明ナルモ其ノ形ヲ見タル上能ク講究ヲ重ヌヘク孰レニセヨ万事牧野男ト御打合セ致ス可シ尚支那ニ関スル事項ニツキテハ之ヲ他國ノ事ト見ラレス出来得ル限り御援助アリタシト述ヘタルニヨリ本大臣ハ右ハ支那ノ態度ニモヨルコトナルカ要スルニ前以テ御打合ナク突然問題ヲ提出セラルルカ如キ事アリテハ助力モ困難ナルヘキ故充分予メ御打合ヲ希望スト答ヘタルニ陸ハ自分ニ於テモ左様致ス積リナリトノ旨ヲ明言セリ

尚本大臣ハ答礼旁同日陸ヲ訪ヒ主トシテ借款問題ニ關シ話

並ニ病中特ニ重任ノコトニモ有リ自重ヲ望ム旨御言葉アリ陸ニ伝ヘタルニ深ク感激ノ意ヲ表セリ尚陛下ヨリノ御返翰ハ小幡公使赴任ノ節携帶スルコトトナルヘク御真影モ多分其節大總統ニ送付スルコトト相成ル可シ右御含迄

註 本電ヲ十二月十二日在米大使ニ転電シ（第六二五号）同大使ヲシテ更ニ在欧各大使ニ転電セシメ又在桑港總領事ニ郵送セシメ同總領事ヨリ牧野男ニ転交セシメタリ

五三〇 十二月十二日

青島軍參謀長ヨリ
參謀次長宛（電報）

中国ハ講和会議ニ於テ膠州湾租借地ノ回収及不平等條約ノ廢止ヲ要求スベシトノ山東省議

会ノ主張ニ付報告ノ件

青電第百九十五号

（十一月十四日外務省写接受）

山東省議会ハ去ル九日條約訂正ヲ要スヘキ要求条件トシテ大統統及ヒ國務院宛左記要旨ヲ電報セリ。米国ハ人道ノ為ニ戰ヒ我カ國ハ正義人道ニ同情シ參戰シ既ニ最後ノ勝利ヲ得タリ今回ノ講和会議ハ人道正義ノ為世界ノ永久平和ヲ講スルニアリ國際上平等ヲ得サル條約ハ理ニ依リテ之ヲ排シ各主權ヲ恢復セシメ平和ノ基礎ヲ鞏固ニスルヲ要ス我カ

國ハ委員ヲ派シテ本會議ニ列席セシム故ニ此ノ趣旨ニ依リ獨塊ニ對シテハ膠州湾其ノ他ノ租借地ヲ回収シ尚一、二ノ條約ヲ廢止シ其ノ列國トノ不平等ノ條約例ヘハ領事裁判権海關稅率等約テ國家ノ主權ニ屬スル件及ヒ經濟ノ發展ヲ阻害スルモノハ訂正スヘキナリ就テハ各主管機關ニ命シ調査ノ上其ノ理由ヲ徵シ會議ニ提出スルノ準備ヲナシ以テ民意ヲ代表スヘシ云々各地済

五三一 十二月十六日

在中国芳沢臨時代理公使ヨリ
内田外務大臣宛

支那陸軍部ノ國際平和會議提出要綱ニ関スル件

件

公第三六二号

（大正八年一月六日接受）

大正七年十二月十六日

在支那

外務大臣男爵 内田康哉殿

臨時代理公使 芳沢謙吉（印）

歐戰休止後支那官民ニ於テ将来ノ國際平和會議ニ多大ノ希望ヲ囁シ過分ノ欲望ヲ抱キ居ルノ情況ハ迭次ノ報告ニテ略示御承悉ノ通リナル処本日ノ晨報其他ノ各漢字紙ハ北京通

一六 パリ講和会議準備一件 五三一

六五四

信社ノ消息在米支那公使ノ報告ナリトテ歐洲平和會議ノ席次ナリトテ第一米國第二英國第三支那第四仏國第五日本ナリト伝ヘ而モ其席次ヲ定メラレタル理由トシテ支那ハ積弱自ラ顧ミ能ハサルノ地位ニ在リナカラ毅然トシテ參戰シ原料及ヒ苦力ヲ供給シテ多大ノ臂助ヲ為シタルカ為ナリ又日本ヲ第五位ニ置クハ日本ハ青島ヲ攻陷シ東洋ノ現勢ト安全ヲ維持シタルノ功アルモ支那ヨリハ遙ニ強勢ノ地位ニ居ナカラ欧戰危急ノ際ニ何等充分ノ助力ヲ為ササルカ為メナリト揭載致居リ右ハ有識ノ士ヲシテ之ヲ見セシメバ元ヨリ一笑ノ価値ダニナキモノナルモ支那人ノ事大心ヲ唆リ過分ノ奢望ヲ煽ルニ余リアル次第将又支那陸軍側ニテハ參事韓麟春ヲ軍事委員トシテ陸徵祥ニ隨行セシメ軍事側一切ノ諮詢ニ応センムルコトトシ右ハ已ニ陸軍部ヨリ大總統ニ呈明シ裁可ヲ得居タル次第ニテ其後陸軍側ニテハ将来國際平和會議ノ問題トシテ支那側ノ主張スヘキ軍事關係範囲大綱四ヶ条ヲ定メ大總統ノ裁可ヲ請ヒ一面夫々取計方國務院ニ書面ヲ以テ申入タル趣ニ候其大綱四ヶ条左ノ如シ

一軍備約數支那面積ト人口トヲ比較シ治安保持ノ為メ少クトモ約八十万トス（海軍ハ此外ナリ所謂国防軍ナリ）

右御参考ノ為メ併セテ及報告候也

五三二 十二月十八日 参謀本部ヨリ

秘 大正七年十二月十八日

参謀特報 支那第三十九号

講和會議ト中国ノ輿論ニ關スル件

参謀本部

講和會議ト支那ノ輿論

講和會議開催ノ声漸ク高ク支那講和使節トシテ外交總長陸徵祥渡欧ノ噂世評ニ上ルヤサナキタニ饅舌ナル支那朝野ノ人士ハ宛ラ自國戰勝後ノ講和問題ニテモ議スルカ如ク頻リニ各種ノ問題ヲ持チ出シテ喧々囂々利權ノ恢復國威ノ伸張ヲ叫ヒ更ニ之ヲ利用シテ何等カノ目的ヲ達セントスル某々国人ノ暗中躍動ト相結ヒテ今ヤ露骨ナル排日的氣勢ヲサヘ上クルモノ尠カラサルニ至レリ而シテ其問題中最モ囂シキハ山東处分問題ニシテ治外法權問題、關稅改正問題、東清鉄道問題等モ亦甲論乙駁ノ好材料タル感ナキニアラス

一、青島処分問題

之ニ対シ建議案ノ先鞭ヲ著ケタルモノヲ山東選出議員王訥トス其要旨ニ曰ク

本ヲ第五位ニ置クハ日本ハ青島ヲ攻陷シ東洋ノ現勢ト安全ヲ維持シタルノ功アルモ支那ヨリハ遙ニ強勢ノ地位ニ居ナカラ欧戰危急ノ際ニ何等充分ノ助力ヲ為ササルカ為メナリト揭載致居リ右ハ有識ノ士ヲシテ之ヲ見セシメバ元ヨリ一笑ノ価値ダニナキモノナルモ支那人ノ事大心ヲ唆リ過分ノ奢望ヲ煽ルニ余リアル次第将又支那陸軍側ニテハ參事韓麟春ヲ軍事委員トシテ陸徵祥ニ隨行セシメ軍事側一切ノ諮詢ニ応センムルコトトシ右ハ已ニ陸軍部ヨリ大總統ニ呈明シ裁可ヲ得居タル次第ニテ其後陸軍側ニテハ将来國際平和會議ノ問題トシテ支那側ノ主張スヘキ軍事關係範囲大綱四ヶ条ヲ定メ大總統ノ裁可ヲ請ヒ一面夫々取計方國務院ニ書面ヲ以テ申入タル趣ニ候其大綱四ヶ条左ノ如シ

一軍備約數支那面積ト人口トヲ比較シ治安保持ノ為メ少クトモ約八十万トス（海軍ハ此外ナリ所謂国防軍ナリ）

右御参考ノ為メ併セテ及報告候也

五三二 十二月十八日 参謀本部ヨリ

秘 大正七年十二月十八日

参謀特報 支那第三十九号

講和會議ト中国ノ輿論ニ關スル件

参謀本部

講和會議ト支那ノ輿論

講和會議開催ノ声漸ク高ク支那講和使節トシテ外交總長陸徵祥渡欧ノ噂世評ニ上ルヤサナキタニ饅舌ナル支那朝野ノ人士ハ宛ラ自國戰勝後ノ講和問題ニテモ議スルカ如ク頻リニ各種ノ問題ヲ持チ出シテ喧々囂々利權ノ恢復國威ノ伸張ヲ叫ヒ更ニ之ヲ利用シテ何等カノ目的ヲ達セントスル某々国人ノ暗中躍動ト相結ヒテ今ヤ露骨ナル排日的氣勢ヲサヘ上クルモノ専カラサルニ至レリ而シテ其問題中最モ囂シキハ山東处分問題ニシテ治外法權問題、關稅改正問題、東清鉄道問題等モ亦甲論乙駁ノ好材料タル感ナキニアラス

一、青島処分問題

之ニ対シ建議案ノ先鞭ヲ著ケタルモノヲ山東選出議員王訥トス其要旨ニ曰ク

トス其前途ニ関係スル甚大ナリ謹テ建議ス云々

先是十二月十日ノ大阪毎日新聞ハ八日北京電トシテ右四項ヲ掲載シタルニ十五日ノ北京各紙ハ（大阪毎日ハ）一齊ニ右ノ謠伝ニ過キサルベキヲ記載シタルニ拘ハラス十六日ノ晨报ノ如キハ右陸軍部ノ國務院ニ宛タル書函全文ヲ暴露致居候

元來參戰督弁處ノ側ニテハ國防軍ナル名義ノ下ニ少クトモ八十萬ノ軍隊ヲ訓練セシ等ノ説ハ從來屢々伝稱セラルル処ニシテ少クトモ軍閥側ノ希望タルハ疑ナク又第二項膠州灣軍港説ニ就イテハ貴電第一一四二号ノ次第モ有之其他第三項ノ義和團條約修改ハ官民政客間ニモ種々ノ希望アリ現ニ此種建議案ノ國會ニ提出サルルモノ一二三ニ止マラサル次第ニテ支那側ニ於テハ何等カノ機会ヲ利用シ之ヲ遂行セントシ居ルハ充分推知セラルル処ニ有之候

一支那ノ海岸線ハ甚々長シ通商保護ノ必要上相當ノ海港ヲ以テ海軍根拠地トスベク右ハ膠州灣ヲ尤モ宜シトス

一以前訂定セル軍事關係ノ者ハ宜シク修改スヘシ例ヘハ義和團條約七、八、九条ノ如キ其他各條約之ニ類スルモノ一浮虜ノ交換及軍費ノ賠費ハ各國ノ取扱振ヲ参照シテ弁理スルコト

トス其前途ニ関係スル甚大ナリ謹テ建議ス云々

又十一月二十二日ノ「ノース、チャイナ、スター」ハ日本

六五五

ヨリ帰来セル支那学生愛國団通電ノ一節ヲ報シタル中ニ

又青島ハ支那領土ノ一部ニシテ独逸ニ強迫セラレ彼ニ貸

与シタルモノナリ初メ日本軍カ千九百十四年戰略的要点

トシテ之ヲ占領シタル時ハ戰後支那ニ還附スヘキ意思ヲ

宣言セリ故ニ支那政府ハ当然之ヲ要求スルノ權利アルヲ

以テ吾人ハ代償的条件ナク青島ノ還附ヲ熱望ス云々

ナル語句アリ同紙ハ又之ト前後シテ次ノ一節ヲ掲ケタリ

支那当局者ノ言ニ依レハ独逸ハ今ヤ征服セラレタル敵ニ

シテ支那ハ實力ニ乏シ故ニ山東省ノ独逸租借地ヲ日本ヨ

リ収ムルニハ青島還附ニ關スル正当ナル希望ニ對シ聯合

与国及米国ノ援助ニ依ルニアラスンハ他ニ採ルヘキ手段

ナシ云々

其他山東省議会カ十二月九日大總統及國務院ニ宛テ

米国ハ人道ノ為ニ戰ヒ我国ハ正義人道ニ同情シテ參戰シ

今既ニ最後ノ勝利ヲ得タリ今回ノ講和會議ハ人道正義ノ

為世界ノ永久平和ヲ講スルニ在リ國際上平等ヲ得サル条

約ハ理ニ依リテ之ヲ排シ各主權ヲ恢復セシメ和平ノ基礎

ヲ鞏固ニスルヲ要ス我国ハ委員ヲ派シテ本會議ニ列席セ

シム故ニ此趣旨ニ依リ独塊ニ對シテハ膠州灣其他ノ租借

地ヲ回収シ尚一、二ノ條約ヲ廢止シ云々

ト打電シ外交部モ亦十二月三日山東督軍張樹元ニ宛テ

青島及附屬鐵道還附問題ニ關シテハ陸特使ノ歐洲ニ赴ク

ヲ待テ平和會議ニ提出スヘキカ故ニ在山東日本人一般ノ

意見ヲ偵察シ中央ニ報告スヘシ

トノ電訓ヲ發セリト伝

是等ヲ総合スルトキハ彼等官民間ノ本問題ニ對スル意向ヲ

察知スルニ難カラサルナリ

二、領事裁判権問題

本問題モ亦講和問題惹起スルト共ニ支那人ノ口ニ上リタル所ニシテ今次講和使ノ中ニ加ハルヘントノ説アル梁啓超ノ如キハ個人ノ希望トシテ此機會ニ領事裁判権ヲ撤廃セシメ

タシトノ口吻ヲ屢々洩シタルコトアリ曩ニ述ヘタル十二月

九日山東省議会ノ通電中ニモ領事裁判権等總テ國家ノ主權ニ属スル件ヲ阻害スル條約ヲ訂正スヘキ意見アリ

又支那ヨリ洩レタルト伝フル一説ニハ米国ハ支那ノ要求ス

ル領事裁判権廢止等ノ問題カ會議ノ議題トナラハ極力之ヲ

援助スルハ勿論若シモ議題トナラサレハ別ニ極東會議ヲ開

催セシメテモ之ヲ解決スヘク声明シ居レリトモ謂ヒ本問題

カ相應ニ根柢ヲ有スルコトヲ知ルニ足ルモノアリ

三、關稅改正問題

是亦最初ヨリ持出サレタル問題ニシテ各方面トモ之ヲ要求スル声相当ニ高キカ如シ

四、東清鐵道問題

露國ノ崩壞以來支那ハ頻リニ此鐵道ヲ自己ノ勢力圈内ニ収メンコトヲ圖リ或ハ新ニ鐵道總弁ヲ任命シ或ハ警備ノ責任ヲロ実トシテ鐵道沿線ニ兵力ヲ配置スル等各種ノ手段ヲ講シ最近起リタル米国ノ鐵道管理権問題ニモ断然反対シタルヲ見レハ其意ノ有ル所ヲ窺知スルヲ得ン

五、勢力範囲撤廃問題

梁啓超ノ私見トシテ日本某要人ニ漏シタル所ニシテ彼カ今次ノ講和使節ニ參加スペシトノ噂高キタケ特ニ顧慮セラル所ナリ梁ハ曰ク

此機會ニ於テ勢力範囲取極メノ如キハ撤廃セシメタキモ
我國ノ現状ニ顧ミ容易ニ行ハレストセハセメテ從來ノ如
ク属國扱ヒヲ受ケサル程度ニ於テ何等カノ保証ヲ得タキ
モノト考ヘ居レリ云々

又曰ク

六、駐支外國軍ノ撤退專管居留地廢止等

北京某國會議員ハ左ノ建議案ヲ提出セリトノ説アリ

北京ニ各國專管區域ヲ限界シ各國護衛隊ヲ置キテ監視スルハ獨立國ノ主權ヲ侵害スルモノニシテ支那ハ内ニ対シテハ内治ノ能力ヲ外ニ対シテハ保護ノ責任ヲ尽セリ故ニ
外國軍隊ノ駐屯ヲ要セス云々

又坊間伝フル所ニ依レハ支那政府ハ講和會議ニ提出スヘキ

条件ヲ討議セル中ニ義和團事件ノ協定條約中

第七条 列國ハ各其公使館ノ為ニ常置護衛兵ヲ組織シ且
公使館所在区域ヲ防禦ノ状態ニ置クノ權利ヲ有シ支那國人ハ右区域内ニ住居ノ權利ヲ有セサルコト

第八条 大沽砲台並北京ト海浜間ノ自由交通ヲ阻碍シ得ヘキ諸砲台ヲ除クコト

第九条 首都ト海浜間ノ自由交通ヲ維持セんカ為ニ列國

一六 パリ講和会議準備一件 五三三

間ノ協議ヲ以テ決定スヘキ各地点ヲ軍事的ニ占領スルノ

権利ヲ有スルコト

ノ三条改正意見ヲ提出スルコトニ決シタリト

七、日支軍事協約廃止及大正四年日支協約ノ破毀

英文北京時務報ハ十一月二十三日支那人ノ投書トシテ「英

米ニ縋リテ日本ノ暴状ヲ天下ニ訴ヘヨ」ナル標題ノ下ニ日

本カ歐戰中支那ヲ圧迫シテ彼二十一箇条ノ要求ヲ提出シ最

近又軍事協定ノ名ノ下ニ山東滿洲蒙古等ニ於テ主權ヲ侵害

シツツアルコトヲ述ヘ之ヲ解決スルハ講和會議ニ於テ正義

アリ同情アル英米ニ縋ルノ外ナシト論シタリ

又例ノ排日学生ノ一団ハ各方面ニ通電シテ

日支軍事協約調印以来日本人ノ勢力ハ支那北方各省ニ侵

蝕シ日本貨幣ハ満洲ニ流通シ日本軍隊ハ東蒙各地ヲ占領

シ支那人及外人ノ均シク認ムル如ク新疆ニ歩ラ進メント

画策中ナリ

今ヤ世界戰爭ハ終局ヲ告ケタルヲ以テ從来吾人ノ恐怖セ

ル其危害ヲ撤回スヘキ好機來レリ故ニ吾人ハ政府當局者

ニ日支軍事協約ヲ撤回センコトヲ切望シ且支那ノ領土保

全ニ対シ他ノ聯合各國ノ疑惑ヲ絶滅センカ為、満洲、東

蒙古ヨリ日本軍ノ撤退ヲ要求センコトヲ望ム
ト述ヘ衆議員議員黃錫銓ナルモノモ亦日支親善ヲ實現スル
方法トシテ

一 豊洲灣ヲ無条件ニテ還附スルコト

二 大正五年ノ日支協約全部ヲ取消スコト

三 大正四年以來ノ日支借款ノ既得権利ヲ取消シ貸借閥

係ヲ他ノ外國借款ニ移スコト

ナル条件ヲ歐洲會議ニ提出スヘシトノ建議案ヲ提出セリト
謂フ

以上ハ固ヨリ四億万人悉クノ声ニハアラス而モ其裏面ニハ

支那人ヲ粧フ外人無キニシモアラス殊ニ唯參戰セリトハ名

ノミニテ曾テ北京外交團カ提出セシ如ク參戰ノ義務ニ於テ

完カラサリシコト頗ル多ク發言權ノ能否ヲサヘ疑ハルルニ

今日以上ノ諸問題ノ幾分カ果シテ貫徹セラルルヤハ固ヨリ

知ルヘカラスト雖又以テ支那人心ノ嚮フ所ヲ窺フノ一資料
トナルヘキモノト信ス

五三三 十二月十八日 在桑港太田總領事ヨリ

講和會議中國代表一行ノ魏宸組ガ桑港新聞記

者ニ中國ガ同會議ニ於テ要求セントスル青島

還附其他ニ闘シ為シタル談話ニ付報告ノ件

附屬書一 桑港クロニクル紙ノ記事摘要

記

二 右記事切抜

公第四四五号 (大正八年一月二十日接受)

在桑港

総領事 太田為吉 (印)

外務大臣男爵 内田康哉殿

新任白耳義國駐劄支那公使兼講和會議支那代表員魏宸組ノ

帶同セル支那講和全權一行中ノ一部ハ昨十七日當地入港ノ

「チャイナ」号ニテ渡來明十九日東行ノ筈ナルカ魏ハ往訪

ノ當地英字新聞記者就中「クロニクル」紙記者ニ別紙摘記

ノ通リ支那ハ講和會議ニ於テ青島ノ還附及ヒ山東省膠州ヨ

リ北京ニ至ル二百哩ノ鐵道沿線ニ樹立セル日本ノ勢力地帶

ノ拠葉ヲ強要スヘシトノ談話ヲ試ミタル趣ニ有之候間何等

御参考迄ニ該談話ノ大要翻訳及新聞切抜相添ヘ此段報告申

進候 敬具

(附属書一)

ノ輸入税賦課ヲ阻止セル我国ノ旧条約状態整理ノ場合ニ近世ノ商業貿易状態ニ関スル点ヲ改正スルニ於テハ我国ハ經濟的独立ノ途ニ自立スルニ至ルヘシトノ意向我国ニ於テ有力トナリツツアリ

極東及支那問題ニ関シ講和会議ニ於テ如何ナル形式ノ解決ヲ遂クベキヤハ固ヨリ茲ニ之ヲ明言スルコト至難ナル可キモ由來極東問題ハ支那問題ニシテ同問題ニ対シテハ米国及爾余諸国カ共ニ痛切ノ利害關係ヲ有スル所ナルヲ以テ該會議ニテ協定解決セラルル所ハ支那ノ平和及繁榮ヲ確立スルニ相違ナク且ツ此事タル講和会議ニ参加スル各国ノ利益トスル所ナルカ支那政府ハ大統領「ワイルソン」カ屢次主張セル主權並既設民衆政治保護ノ根本理ヲ我国ニモ適用セントヲ所期シテ已ムベ

青島ヲ支那ニ還附セサルヘカラサルコトハ何等疑義ナキ所ニシテ我国ニ於テハ旅順大連ヲモ我国ニ還附セサルヘカラベムノ意向存スル位ニテ青島還附ニ付テハ毫頭疑義ノ余地ヲ認メス抑モ該利權ナルモノハ独逸カ我国ヨリ租借セルモノハ大戰勃発ノ際日本カ日英同盟ノ條項ニ基キ同地ヲ攻撃シテハ掌握シタルヤヘリシト沿海支那ヘ日本ニ対シ独逸リ

(附屬書II)

十一月十八日附サハフヲハシベロ、クロニクル記事切抜

KIAOCHOW'S RETURN TO BE DEMANDED

Peace Delegate Reach Here Headed by Sun Tchou Wei, Envoy to Belgium

Wilson's Terms Suited to Far East Situation, Is View Expressed

The return of Kiaochow to China and the abandonment of the Japanese zone of influence established along the railroad for 200 miles out of Kia-

chow in Shantung province will be urged at the peace conference by the Chinese peace delegates, who are now en route to Europe. A portion of the delegation, headed by his excellency, Dr. Sun Tchou Wei, Chinese Minister to Belgium, arrived on the liner China yesterday. Others were Dr. Thomas King, Dr. W. Tchau, K. Tcheng and C. Zee. Another delegation is now on the Pacific and will arrive at Seattle on December 27.

According to the delegation, China is now preparing to battle at the peace table for the adoption of all of President Wilson's fourteen points, as they believe this will alone safeguard their country's commercial and economic interests and will especially protect her against an aggressive attitude of Japan.

CHINA FOR WILSON'S AIM

The most progressive thought in China, according to Wei, desires the full application of the fundamentals laid down by President Wilson in the settlement of problems besetting the Chinese republic. This alone will insure territorial integrity and

the removal of those barriers which serve to prevent nations, both small and great, from attaining full development of the resources within their borders, the leaders believe.

The diplomats of China are convinced that the settlement of the Far Eastern question must be one to give China her rights, full protection and a safe position that will enable her to repel the aggressions of her ambitious neighbor.

The delegation also believes that provision must be made at the peace conference for the future economic development of China on a basis that will enable the Peking Government to realize revenues from the foreign trade of the country sufficient, at least, to make it unnecessary to borrow funds from Japan or any other nation.

SEES ECONOMIC FREEDOM

There is a strong feeling that in case of re-adjustment of the old treaty conditions that prevent the levying of an import customs rate higher than 5 per cent, especially if the readjustment is made with regard to modern business and trade condi-

リ奪取セル自國領域ヲ還附セハコトヲ提言シタルモ日本ハ之カ商議ニ応スルコトヲ拒否シタルヲ以テ我国ハ本問題ハ講和会議ニ附スベキコトニ決意セリ然ルニ其後支那カ独逸ニ宣戰スルヤ独逸トノ一切ノ条約及協約ハ自動的ニ廢棄セラニ我國ハ日本ノ盟邦トナルニ至レルモ尚日本政府ハ膠州灣ヲ保有シ以テ同國ノ盟邦タル我國ノ財產ヲ保留スルノ地位ニ立チタリ加之日本ハ最近青島ニ民政ヲ布キ且膠州ヨリ北京ニ至ル鉄道沿線一百哩ヲ画シ山東省ニ蚕入スルニ至レリ云々

tions, China will be placed on the road to economic independence.

"It is difficult to say at this time what form of solution will be reached at the peace conference regarding the affairs of the Far East and China," said Wei. "The problem of the Far East is that of China, and is of intense interest to this and every other country, and any solution arrived at must settle the peace and prosperity of China, and this is to be the interest of every country that will participate in the conference. The new Government of China seeks to have that fundamental applied to her that has so often been advocated by President Wilson, the protection of sovereignty and established popular government.

KIAOCHOW RETURN DEMANDED

"That Kiaochow must be returned to China cannot be questioned, we think. There is a feeling in China that even Port Arthur and Dalny must be restored to China, but there is no question about Kiaochow. That concession was under lease by China to Germany, and when the war broke out Japan,

under the terms of the Anglo-Japanese alliance, attacked and seized the concession. China made overtures to Japan for the return of her territory seized from Germany, but Japan refused to negotiate, whereupon China has decided that the question should be referred to the peace conference.

"Later, however, when China declared war against Germany, all the treaties and agreements with Germany automatically were abrogated. China then became the ally of Japan. Tokio then, by retaining possession of Kiaochow, was in a position of withholding the property of her ally.

JAPAN PENETRATES PROVINCE

"More recently Japan has proceeded to organize civilly Kiaochow and has even penetrated Shantung province for 200 miles along the railroad toward Peking."

Although Wei has been designated to represent China in Belgium, he will not be officially appointed until after arrival in Paris. He will sit at the peace table first, however, and it may be some time before he takes up the duties of his official position as

Minister. The entire party had expected to proceed through to the Atlantic, but a large delegation of the local Chinese persuaded the visitors to remain here until today.

会议十一月廿一 在廣東太田總領事（内田外務大臣宛）（電報）
講和會議二中國南方代表派遣二關ハ廣東政府
部内意見对立ノ件

第1111五号

伍朝枢ハ十一月十八日当地發上海ニ赴キタルガ聞ク所ニ依ニハ上海ニ於テ王寵惠ニ合シ共ニ陸徵祥ノ跡ヲ追ヒ平和會議ニ参列スル予定ノ由ナルガ尚伍ハ北京政府ト密議ノ上旅費二千元ヲ受取出發セリトハ爵モアリ十九日ノ政務會議ニ於テ張伯烈、趙成鉉、吳永珊等軍政府當局ニ対シ伍ノ此行動ハ私人トシテナリヤ公人トシテナリヤ又南方ノ代表ナリヤ北方ノ代表ナリヤト質問セシニ各總裁ヨリ満足ノ答弁ナク張等ハ之ニ異ニ伍廷芳等五人ヲ南方ノ代表トシテ派遣スルヨリユーベル政務會議ノ決議ヲ無視スルモノナリト為シ頻ニ攻撃シ此問題ヤ亦張等一派ト軍政府ト意思ノ確執ヲ來シ

ハシトヲ（北京、上海、電報ヤ）
~~~~~  
会议十一月廿一 在英國珍田大使（内田外務大臣宛）（電報）  
講和會議二於テ記譲ナシ想ヤタルル極東關係  
案件二題ハ英外務省極東部長ノ内詔報知ハ生  
第1111六号  
講和會議ニ議セハシテ既ハルル極東關係案件ムシテ  
「ヤハクスハホー」ハ十一月廿一在内詔報知ハ生  
ヤリ

1 往電第1〇<sup>(註)</sup>号ニ譲シ英國政府今尚決定セサルモ同電末段ノ次第付「ヤクニイ」折角研究中  
実業借款包含ハ難問ニシテ「ホバムニ」云々ハ意義不明ハ付米國側ト曰里ニ於テ熟談ノ要アリ米國政府ハ日本ノ支那ニ於ケル territorial propinquity ハ基ク特殊ノ利益ヲ承認シタルニ付同政府ハ該利益ヲ否認スルノ意向ハ勿論ナカルハキガ英國政府ハ他国ニシテ同様ノ措置ニ出シル場合ニ支那ニ於ケル exclusive commercial ハ放棄スルヲ辞セサルくシ

造国（独逸ヲ指ス独逸ノ如キ「マルク」及「バー・デン」、「アニリン」製造所ニテ盛ンニ良品ヲ製シ大利益アルニ付

同國ハ条約ニ調印セシモ批准ヲ峻拒シ又「プロトコール」ニ署名セス）ニシテ加入セサルニ於テハ条約施行ノ効ナカルヘシトノ趣意ニテ約十日前回答シタルカ英米何レカ発議シ會議ニテ独逸ヲシテ施行ニ同意セシムル意向ナリ

在支那独逸専管居留地ハ戰後独逸ニ還附スル説アルモ斯クテハ聯合国将来ノ為不利ニ付英國政府ハ之ヲ共同租界トスル希望ナリ

四 支那ハ講和条件ヲ英國ニ通知シタルコトナキモ巴里會議ニ於テ Extraterritoriality 廃止ヲ提議スベキカト想像セラル英國ハ到底之ニ応シ難キニ付漠然タル約束ニ止メ裁判所ノ改革等ヨリ始メ暹羅ニ於ケルガ如ク徐々ニ進行ノ外ナカル可シ

米、仏、伊ヘ転電セリ

註 日本外交文書大正七年第二冊二六六文書

五三七 十二月二十二日 在中国芳沢臨時代理公使ヨリ 内田外務大臣宛（電報）

中国ハ講和會議ニ於テ領事裁判制度ノ撤廃及  
関税自主権ノ回復ヲ提議ノ際ハ日本ノ援助ヲ  
得タキ旨梁啓超來談ノ件

第一七九七号

十二月二十一日梁啓超來訪ノ節同人ヨリ自分ハ今回全然私ノ資格ニテ渡歐スル次第ナルモ講和會議ノ際支那領事裁判制度ノ撤廃及関税自主権ノ回復ニ付提議スルコトトナルヤモ難計直チニ実行スル事ハ目下ノ情態ニテハ無理ナルヤモ知レザルニ付今ヨリ何年後トカ又ハ法律制度ノ完備ヲ俟チテトカ云フガ如キ条件ハ之ヲ附スル事已ムヲ得ザルヤモ知レズ兎ニ角右提案ノ節ハ日本委員側ニ於テモ十分ノ援助ヲ与ヘラレシ事ヲ希望スト述べタリ（本官ハ陸總長ノ林公使ニ対スル談話等ニ依レバ右ハ共ニ支那政府ノ提案中ニハ無之モノノ如シト云ヘルニ対シ梁ハ政府ノ案トシテ決定シタル訳ニ非ザルモ結局提出ノコトトナルヤ計リ難シト答ヘタリ）依テ本官ハ此等貴國ノ希望ニ対シテハ自分ニ於テモ表

的及資格ニ関スル件

第一七九一號

十二月二十二日「モリソン」ガ本官並船津ニ対シ各別ニ語リタル所ヲ綜合スルニ同人ハ支那政府ノ内命ニ依リ渡欧スルモノナルモ表面ハ休暇ヲ得テ英國ニ赴クモノニシテ從テ全然一個人ノ資格ナリトノコトナリ但シ仏國ニ赴キ裏面ニ於テ陸總長ノ諮詢ニ応スルコトアルハ勿論ナリ尚同人ハ本月二十六日当地出發日本ニ直行來月二日横浜出帆ノ伏見丸ニテ加奈太經由華盛頓ニ赴キ「ウキロビ」博士ト會合シ同地ヨリ兩人相携ヘテ一応倫敦ニ渡リタル後更ニ仏國ニ赴クコトトナルヘシ又支那政府ハ最初「デニス」博士（「ウキロビ」ノ後任トシテ支那政府ノ顧問タリ）ニ対シ仏國出張方ヲ交渉シタルモ米國政府ハ平和會議列席ノ外國代表ニハ一切米国人ヲ附隨セシメサル方針ナルヤニテ之カ為メ見合トナリタル由ナリ從テ「ウ」博士モ果シテ「モリソン」ト同行出来ルヤ否ヤ同人華府着ノ上ナラテハ確カナラサル趣ニテ広東伍朝枢等ハ渡欧ノ途次上海ニ会合同行シ度旨電報ニテ同人ニ依頼シ来（脱）同人ハ船便其他ノ都合上之ヲ拒絶シタル趣ナリ

心ヨリ同情ヲ有スル儀ナルガ実ハ我日本モ御承知ノ通り此等ニ問題ニ付テハ永ク困難ノ立場ニ在リテ奮闘努力ノ結果漸クニシテ其目的ヲ達シタル様ノ次第ニシテ貴國トシテモ先以テ法制ノ改善産業ノ發達等必要ノ前提ヲ充タサルルクト肝要ナル可シトノ趣旨ヲ程ヨク答ヘ置キタリ御参考迄ニ

註 本電外務大臣ヨリ在米大使ニ転電シ（第六五〇号）同大使ヲシテ在欧各大使ニ転電セシメタリ

五三八 十二月二十六日 在英國珍田大使宛（電報）

別 電一 同日内田外務大臣發珍田大使宛第七〇二号  
講和ニ関スル日本政府ノ方針決定ニ付訓令ノ件

二 同日内田外務大臣發珍田大使宛第七〇三号  
講和ノ三大方針

三 同日内田外務大臣發珍田大使宛第七〇四号  
山東鐵道並鉱山ノ讓渡要求及其ノ押收ニ関スル損害賠償ノ拒絶

獨逸ノ割譲地ノ官公有造營物及財產ニ

## 一六 パリ講和會議準備一件 五三八

六六六

関スル要求其ノ他独逸人関係ノ事業及

財産關係ノ帝国要求事項

附記 ウィルソン十四箇条ニ対スル帝国政府意見

見

### 第七〇一號

帝国政府ハ講和ニ閥スル方針ヲ考査シ今般別電一乃至三ノ通決定セリ

帝国政府ハ閣下等カ右決定方針ニ遵由シ何レノ場合ニ於テモ絶エス英國其他聯合与國代表者ト緊密ナル接触ヲ保チ帝國大局ノ利益ニ反セサル限り可成与國ト歩調ヲ一ニシ且常ニ公正穩健ノ主義ニ則リ以テ帝国ノ威信ヲ發揚スルニ力メラルヘキヲ期待ス

惟フニ講和會議ノ結果ハ我國運ノ消長ニ深甚ナル影響ヲ及ホスヘキモノ少カラス帝国政府ハ閣下等今次ノ任務極メテ重大ナルヲ認識シ一ニ閣下等ニ信賴シテ光榮アル和局ヲ収メムコトヲ冀フ

本電ハ別電ト共ニ牧野男ニ転電シ置ケリ

本大臣ノ訓令トシテ本電別電ト共ニ松井大使ニ転電アリタシ

(別電一)

### 五何レノ場合ニ於テモ聯合与國カ各自ノ讓渡要求地域ニ閥

スル同様ノ権利又ハ物件ニ付執ルヘキ態度殊ニ赤道以南獨領南洋諸島ニ閥スル英國ノ講和条件ヲ参照シ成ルヘク之ト歩調ヲ一ニスルコト

### 第一 帝国ノ直接ニ利害關係ヲ有セサル講和条件

聯合与國ノ提出スヘキ講和条件ニシテ帝国ノ直接ニ利害關係ヲ有セサルモノニ付テハ帝国代表者ハ特ニ必要ナキ限り之ニ容喙セサルト共ニ絶エス其ノ討議ノ經過ニ注意シ必要ニ応シテ発言ノ機会ヲ逸セサルコトニ努ムルコト

第三 帝国カ聯合与國ト共通ニ利害關係ヲ有スル講和条件帝国カ聯合与國ト共通ニ利害關係ヲ有スル講和条件ニシテ曩ニ米國大統領ノ発案ニ係ルモノニ付テハ別紙第三号ニ依ルヘク其ノ以外ニ亘ルモノニ付テハ大勢ノ帰向ヲ省察シ成ルヘク聯合与國ト歩調ヲ一ニスルコト

(別電二)

十二月二十六日内田外務大臣発在英國珍田大使宛電報第七

○三号

山東鉄道並鉱山ノ讓渡要求及其ノ押収ニ閥スル損害要償ノ拒絶

### 第七〇三号別電二

一六 パリ講和會議準備一件 五三八

十二月二十六日内田外務大臣発在英國珍田大使宛電報第七

○二号

講和ノ三大方針

### 第七〇二号別電一

第一 帝国カ聯合与國ト单独ニ利害關係ヲ有スル講和条件一青島及赤道以北南洋諸島ニ対スル独逸國領土權ノ無償讓渡ヲ要求スルコト

二山東省及赤道以北南洋諸島ニ閥シ独逸國カ國家トシテ享有スル権利及独逸國又ハ独逸公法人ノ所有スル物件ノ無償讓渡ヲ要求スルコト

三前項地域ニ閥シ名義上独逸人民又ハ独逸私法人ノ享有スル権利若ハ其ノ所有スル物件ト雖事實上独逸國政府ニ於テ全部又ハ主要ノ利益ヲ有シ且該事態ノ存続カ帝国ノ緊切ナル利益ニ反シ又ハ第一項領土權繼承後ニ於ケル帝国ノ施政ニ煩累ヲ貽スヘキモノニ付テハ之カ讓渡ヲ要求シ其ノ讓渡ニ対シテハ帝国政府ハ衡平ノ見地ニ基キ相当ノ補償ヲ為スノ決意ヲ有スルコト

四前項ノ適用ニ属スル帝国ノ具体的要求事項ニ付テハ別紙

第一号及第二号ニ依ルコト  
四前項ノ適用ニ属スル帝国ノ具体的の要件ニ付テハ別紙第一号及第二号ニ依ルコト

### 別紙第一号

第一 青島ニ閥スル我帝国要求条件中領土領水ノ租借權ノ讓渡要求ヲ除キテハ山東鐵道及鉱山ノ讓渡ヲ以テ閥要最モ重シトス隨テ之カ要求ノ主張ニ対シテハ折衝上全力ヲ尽シ最モ確実ナル論拠ニ依リ且衡平ナル態度ヲ示シ必成ヲ期スヘキ事

第二 該鐵道ノ敷設權又ハ營業權及鉱山ノ採掘權ト租借權トノ不可分説ヲ唱フルカ如キ却テ異日ニ後害ヲ貽スノ虞アルモノ或ハ戰爭中一時該鐵道ヲ軍用ニ供シタルカ如キ或ハ一定ノ貢金ヲ納入シ或ハ廉価ニテ採鉱ヲ供給シタルカ如キ或ハ役員ノ選任ニ付認可ヲ要シタルト云フカ如キ等ノ末節ニ就キ引証スルトキハ論議自ラ多岐ニ亘リ勢ヒ折衝ノ稽延ヲ來スノミナラス其ノ中ニハ却テ對手國ノ藉リテ抗争ノ辭柄ト為スヘキモノナキニ非ス概シテ該鐵道及鉱山ノ法理的性質論ニ涉ルモノハ往々我主張ニ対シ不利ヲ招クノ危惧アルヲ以テ之ヲ避クルヲ得策ナリトスル事

第三 該鐵道及鉱山ノ讓渡ヲ對手國ニ要求スルニハ戰勝ノ權利ニ依リ一理直截政治上ノ論拠ヲ以テスヘキ事

## 第四 該鉄道ノ敷設権及鉱山ノ採掘権ハ對手國ノ政府力曾

テ支那政府ヨリ國際條約ニ依リ獲得シタル權利ニ属シ對手國政府カ之ニ拠リテ以テ政治上及經濟上特殊ノ地位ヲ占有シタルモノナルカ故ニ此ノ如キ對手國ノ國際的權利ノ存続ハ将来東洋ノ大局ヲ顧念スルニ於テ永遠平和ノ担保ヲ確実ニスル目的ニ対シ障害ヲ及ホスヘキモノト認ム

ルニ因リ帝国政府ハ戰勝ノ權利ニ依リ對手國政府カ該鐵道及鉱山ニ関シテ曾有スル一切ノ權利繼承ヲ要求スル事

第五 該鐵道及鉱山ノ會社カ其ノ形式ニ於テ又實質ニ於テ私設ナルト公設ナルトヲ問ハス該鐵道及鉱山ト對手國政

府トノ關係ハ平時戰時共ニ支那國ニ在リテ支那國ノ支配権外ニ立チ常ニ對手國ノ支配権内ニ属シテ對手國ノ勢力伸張ノ用ニ供セラレタルモノナルカ故ニ前項ノ理由ニ拠リ該會社ノ行使シタル營業権ヲ繼承スルハ同シク我帝國戰勝ノ權利ニ基ク當然ノ結果ニ属スヘキ事

第六 帝國政府ハ衡平ノ見地ニ基キ該鐵道及鉱山經營ノ為ニ投資設備セラレタル動的及不動的ノ財產ハ該會社ノ私有ナルヲ認メ之ニ對シテハ我帝國軍ノ押收當時ニ現存セシ狀態ニ於テ有セシ価値ニ從ヒ一定ノ金額ヲ提供スル意

## 志ヲ表示スル事

第七 帝國政府ヨリ前項ノ金額ヲ提供スル以上ハ對手國政府ヲシテ該會社ノ權利特權及財產ニ關シ該會社及其ノ他

第三者ヨリ提起スルコトアルヘキ一切ノ要求ニ付其ノ責ニ任スルコトヲ約諾セシムル事

第八 前項帝國政府ノ提供金額ハ鐵道ニ對シ金五百万円鉱山ニ對シ金五百万円總計金參千萬円ヲ標準トシ多少ノ増減ハ互讓ノ精神ヲ以テ對手國ノ全權委員ト折衝妥定ヲ図ルヘク之カ為ニ特ニ評價委員ヲ選定シテ其ノ調査決定ニ委スルカ如キ煩累ヲ避ケル事

第九 前項ノ提供金額ニ付彼我折衝ノ結果竟ニ妥協ヲ得サル場合ニ於テハ對手國政府ヲシテ該鐵道及鉱山ニ關シ其ノ曾有ニ係ル一切ノ權利繼承ヲ帝國政府ニ對シ約諾セシムルニ止メ帝國政府ハ該會社ノ私有財產ニ對シテ既成事實ニ基キ該鐵道及鉱山ノ押收管理ヲ實行スルノ決意ヲ表示スル事

第十 該鐵道及鉱山ノ押收管理ヲ統行スルノ止ムヲ得サル場合ニ於テハ帝國政府ハ該會社ノ要求若ハ訴訟ニ對シ守勢ニ拠リテ之ニ應答若ハ防訴スルノ利便ヲ占ムルコトヲ示スル事

該押收ニ對シテハ帝國政府ハ何等抗議ヲ受クヘキ理由ヲ認メサル事

第十四 前項ノ押收ハ敵地財產ノ押收ト類推シ得ルモ該鐵道經營ノ為ニ投資設備セラレタル動的及不動的ノ財產ハ猶私有ニ属スルモノタリ從テ損害要償ノ事由トナリ得ヘキモ元來鐵道ノ經營ハ對手國ノ支那ニ於ケル勢力伸張ノ用ニ供スルヲ目的トシタルト又戰時中ノ押收ハ主トシテ

對手國ノ橫暴ナル行動ニ依リ生シタル結果ナルトニ因リ我帝國政府ハ該押收ニ對シ何等責務ヲ負フヘキ理由ヲ認メサル事

訂正ヲ加フヘキ事

第十三 山東鐵道ノ押收ニ關シテハ戰爭當時該會社ヨリ米

國政府ヲ經由シテ抗議ノ提出アリ又支那政府ヨリモ同一ノ抗議アリタリ元來該押收ハ純然タル敵地財產ノ押收ニ非サルヲ以テ海牙陸戰條規ノ適用アリト云フ能ハサルモ

支那政府カ曾テ條約ヲ以テ對手國軍隊ノ自由通過ヲ認容シタルト又戰爭中ニ於テ該政府カ自ラ中立權ヲ維持スルコト能ハサリシトニ因リ我帝國軍隊ヲシテ臨機應急ノ措置ヲ取ルノ止ムヲ得サルニ出テシメタルモノナルヲ以テ

## (別電三)

十二月二十六日内田外務大臣堯在英國珍田大使宛電報第七〇四号

獨逸ノ割譲地ニ於ケル官公有造營物及財產ニ關スル要求其他財產關係ノ帝國要求事項

第七〇四号別電三

別紙第一号

第一 帝國ニ讓渡セラルヘキ土地ニ存在スル官有若クハ公有ノ造營物及財產ノ讓渡ハ戰勝ノ權利ニ基クモノニシテ當然無償讓渡ヲ要求スヘキ理由アル事

第二 スネートラーゲ、ウント、ジムセン会社ハ講和準備委員ノ調査ニ係ル細大ノ事実ニシテ其ノ認定ニ由ルモノト又推測ニ出ツルモノトヲ問ハス果シテ実際ニ相違ナキモノト仮定スルニ於テハ之ヲ總督府建築行政ノ為ニ存立スル國家ノ機関ナリト認ムルコトヲ得ヘク隨テ其ノ所有ノ土地家屋及家具ハ之ヲ官有財產ト認ムルコトヲ得ヘキ事

第三 該会社ノ性質及財產ニ関シテハ前項ノ認定ヲ正当ナリトスルモ該会社創立ノ際スネートラーゲ及ジムセン両名ヨリ金拾万馬克ノ金額ヲ投資シタルノ事実ハ之ヲ確認スヘキモノナルヲ以テ對手國政府ニ於テ該会社ノ權利特權及財產ニ關シ該会社及其ノ他ノ第三者ヨリ提起スルコトアルヘキ一切ノ要求ニ付其ノ責ニ任スルコトヲ約諾スルニ於テハ帝國政府ハ衡平ノ見地ニ基キ第十九項ノ規定ヲ準用シ該出資額ヲ提供スルノ意思ヲ表示シ妥協ヲ図ルヘキ事

第四 在青島獨逸裁判所地下室收蔵金百五十萬四千弗ニ關シ講和準備委員ノ調査ニ係ル細大ノ事実ニシテ其ノ認定ニ由ルモノト又推測ニ出ヅルモノトヲ問ハス果シテ實際ニ相違ナキモノト之ヲ仮定スルニ於テハ對手國政府カ

テハ

- (一) 該会社ハ對手國ノ統治機關ナルト同時ニ其ノ企業ノ代理人ナル事
- (二) 該会社ハ輸出燐礦ニ對スル頓稅並貢納金ハ株主配當金總額ノ約半ニ達スル如キ鉅額ナルコト
- (三) 該会社ノ所有ニ移転シタル地所ハ事業中止ノ場合ニ於テ之ヲ買戻スノ權利ヲ對手國政府ニ留保シ又會社ノ特權消滅又ハ會社ノ解散ト共ニ其ノ不動的設備ハ對手國ノ國庫ニ帰属スヘキ約束アル事

(四) 該会社ハ無線電信所ノ設置植林其ノ其他島ノ買入等ニ關シ對手國政府ヨリ多大ノ利便ヲ受ケ居ル事

(五) 該会社ノ存続ヲ認ムルトキハ我帝國カ之ヲ領有スルノ価値ヲ全然減却スルモノナル事

ノ五点ヲ列挙スルモノ元來該会社ハ株式組織ヲ以テ成立シタル私立会社ナリ而シテ其ノ事業ハ營利ヲ目的トスル燐礦採掘及販売ニシテ何等公的性質ヲ有スルモノニ非ス一千九百十三年ノ同社貸借対照表ニ依ルニ「アンガウル」島施設費金二、七〇九、八七五馬克ニシテ減価償却金五二二、七九一、馬克ヲ差引金二、一八七、

米國大使ヲ通シテ提出シタル抗議ハ正当ノ理由ナキモノトシテ之ヲ拒斥シ該收蔵金ハ純然タル官有財產トシテ之ヲ押收シ又沒收スルハ我帝國軍ノ權利ニ屬スル事

第五 青島ヲ起點トシテ上海及芝罘ニ連絡セラル海底電線ノ經費ハ對手國政府ノ支出ニ係リ其ノ經營管理ハ該政府ノ通信省ニ依リテ施行セラレ其ノ業務ハ國家ノ事業ニシテ其ノ財產ハ官有ニ屬スルモノナルカ故ニ帝國政府カ其ノ讓渡ヲ要求スルハ戰勝ノ權利ニ基ク當然ノ結果ナル事

第六 該海底電線ノ讓渡ハ租借地ニ附屬シテ之ト運命ヲ共ニスヘシト謂フカ如キ租借權トノ不可分説ニ類似スル論拠ハ之ヲ避ケルヲ得策ナリトスル事

第七 該線ノ芝罘及上海ニ於ケル陸揚局並外國電信分社トノ關係等ハ讓渡後ノ協定ニ讓リ此際ハ對手國政府ヲシテ其ノ曾有スル權利特權及財產ヲ讓渡セシムルニ止メ其ノ余ノ处分ハ之ヲ異日ニ讓ルヘキ事

第八 我帝國ノ領有ニ歸スヘキ南洋諸島ニ於テ獨逸南洋燐礦株式會社ニ屬スル權利土地設備及財產ノ無償讓渡要求ニ關シ講和準備委員ノ調査ニ係ル要求理由ノ根拠トシテ該会社ノ代理者ナリト認定スルカ果シテ株主ノ払込ニ待タシシテ全然對手國政府ノ支出ニ係ルト又果シテ實際持分ヲ有スル株主ナキトノ事實上ノ認定アルニ非ザレバ徒ニ之ヲ視テ國立ナリ又ハ国有ナリト斷定スヘキニ非ス抑モ該会社ハ絕海ノ孤島ニ在リテ採礦ノ業務ニ從事スルモノニシテ該島ノ住民ハ概皆該会社ノ從業員ナルヲ以テ對手國政府カ便宜上行政權ノ一部ヲ委任シタルコトアルモ之ヲ以テ該会社ハ對手國ノ統治機關ナルト同時ニ其ノ企業ノ代理者ナリト速断スルカ如キ素ヨリ失当ノ見タルコトヲ免レス況ヤ第二点ノ頓稅及貢納金ノ如キ其ノ他第三乃至第五ノ三点ノ如キ孰レモ却テ其ノ私立ノ性質タルコトヲ反証スヘキモノナルニ於テヲヤ之ヲ要スルニ叙上ノ五点共ニ事實相違又ハ論拠矛盾若ハ薄弱ノ譏議ヲ免レサルモノナルヲ以テ断シテ我帝國要求ノ理由ノ根拠ト為スヘカラサル事

第九 該会社ノ採掘ニ係ル燐礦ハ近時本邦ニ輸入シテ大ニ我農業ノ發展ヲ利シ經濟上ノ見地ヨリシテ閑要甚々重キニ居ルモノナルカ故ニ更ニ比較的確実ナル論拠ヲ攻究シテ該会社ノ讓渡ヲ要求シ此際領土領水ト共ニ之ヲ獲得ス

ルノ手段ヲ講スルハ必要止ムヘカラサル事

第十 該会社ノ採掘スル燐礦ハ鉱業法ノ支配ニ属シ其ノ所有權ハ元來領土權ニ属スルモノナルカ故ニ領土權ノ讓与ト共ニ該会社ノ採掘權ハ當然我帝国ニ讓渡セラルヘキモ

ノト謂フヲ以テ要求理由ノ第一点トスヘキ事

第十一 該会社カ對手國政府ヨリ既ニ採掘ノ特許ヲ得タルノ一事ヲ以テ抗争スヘキモノ凡ソ特許ヨリ生シタル權利義務ハ之ヲ附与セル國家ト之ヲ獲得セル私人トノ特別關係間ニ成立存続スルモノ即チ純然タル国内法上ノ權利義務

ニ属シ國際法上ノ權利義務ニ非ス隨テ我帝国ハ領土權ノ獲得ト共ニ對手國政府ノ義務ヲ負担スヘキモノニ非スト謂フヲ以テ要求理由ノ第二点トスヘキ事

第十二 我帝国ニ於テ領土獲得ノ後ニ於テ我帝国ノ内国法ハ帝國ノ国籍ニ属スル個人若ハ法人ニ非サレハ採掘ヲ許

サス外國ノ籍ニ属スルモノニ對シテハ之ヲ禁止スルモノナルカ故ニ我国内法ノ規定ニ依リ領土權獲得ノ後該会社ノ採掘權ヲ認ムルコト能ハサルノ意思ヲ表示スル事

第十三 万一對手國ニ於テ我新領土タル朝鮮ニ於ケル特例ヲ引証スル場合ニ於テハ朝鮮ノ合併ハ双方ノ合意ニ成立

シタルモノニシテ今回ノ讓渡トハ素ヨリ同一視スヘカラサルノミナラス旧韓國政府ノ曾有シタル權利義務ヲ併セテ之ヲ繼承スヘキ特約ニ基クモノナルコトヲ説明スヘキ事

第十四 帝國政府ハ領土權ト共ニ該会社ノ採掘權ニ対シ讓渡ヲ要求スルモ衡平ノ見地ニ基キ該会社カ採礦經營ノ為投資設備シタル動的及不動的財產ニ對シテハ其ノ私有財産ナルヲ認メ之ニ對シテハ一定ノ金額ヲ提供スルノ意思ヲ表示スル事

第十五 帝國政府ヨリ前項ノ金額ヲ提供スル以上ハ對手國政府ヲシテ該会社ノ權利特權及財產ニ關シ該会社及其ノ他第三者ヨリ提起スルコトアルヘキ一切ノ要求ニ付其ノ責ニ任スルコトヲ約諾セシムル事

第十六 前項帝國政府ノ提供金額ハ該会社ノ私有ニ属スル動的及不動的財產ニ對シ金武百五拾万參千九百拾六馬克（千九百十三年ノ同社貸借對照表ニ依ル第八項ノ施設費二、一八七、〇八四馬克並貯藏品見積額三一六、八三二馬克ヲ含ム）ヲ標準トシ多少ノ增減ハ互讓ノ精神ヲ以テ對手國ノ全權委員ト折衝妥定ヲ圖ルヘク之カ為ニ特ニ評

価委員ヲ選定シテ其ノ調查決定ニ委スルカ如キ煩累ヲ避クヘキ事

第十七 前項ノ提供金額ニ付彼我折衝ノ結果竟ニ妥協ヲ得ス又ハ会社ノ權利財產ニ關シテ處分權ナキコトヲ主張シテ對手國政府カ該会社ニ關シテ何等約諾スルコト能ハサル場合ニ於テハ帝國政府ハ對手國政府ヲシテ領土割譲ノミヲ約諾セシメ該会社ノ処分ハ之ヲ領土獲得後ニ讓リ第十項乃至第十二項ニ指定セル趣旨ニ依リ該処分ヲ結了スルマテハ押收管理ヲ統行スヘキ事

第十八 領土獲得後帝國政府ト該会社トノ間ニ直接妥結ヲ得ル場合ニモ該会社ニ對スル第三者ノ要求ニ關シテハ該会社ヲシテ一切其ノ責ニ任スルノ条件ヲ約諾セシムルノ必要アル事

第十九 第十六項ノ提供金ハ戰費償金ノ中ヨリ之ヲ控除スルコト能ハサル場合ニ於テハ現金若クハ相當期限ヲ償還期トスル帝國公債ヲ以テ之ヲ支払フ事

第二十 対手國政府又ハ該会社ヨリ該会社ノ設備押收兼押收中燐礦ノ採掘搬出ニ對スル損害賠償ヲ要求スル場合ニ於テハ帝國政府ハ之ニ對シ該押收ノ正当ナル理由ニ基ク

コトヲ論証スヘシ当初我帝國海軍ノ「アンガウル」島ヲ占領スルヤ軍事上ノ必要ニ基キ同島燐礦會社ノ獨逸人一同ニ退去ヲ命シ同會社ノ燐礦採掘ハ一時中絶ノ止ムナキニ到リ之カ為ニ俄ニ生業ヲ失ヒ飢渴ニ迫ルノ虞アルヨリ一面ニ於テハ占領地施政上救濟ノ手段ヲ執ルト共ニ又他面ニ於テハ該會社ノ設備ヲ放任シテ廃滅ニ付セサラン為ニ保護ヲ図ルノミナラス該設備及燐礦ノ奪掠ヲ防ク為ニ管理ノ必要上止ムヲ得サルニ因ルモノニシテ乃チ該押收並管理ノ正当ナルヲ証スヘク隨て之カ為ニ何等賠償ノ責任ヲ負フヘキ理由ヲ認メサルナリ然レトモ帝國政府ハ平衡ノ見地ニ基キ該押收管理行為ノ結果實際押收中ニ取得シタル収益アラハ之ヲ該會社ニ返還スヘキ意思アルコトヲ表示スヘキ事

第二十一 ヤルート會社ハ燐礦採掘ノ外無主ノ土地ヲ占有シ或ハ真珠貝ヲ採取シ或ハ大規模ノ植林ヲ為ス等ノ特權ヲ独逸政府ヨリ受ケ居リテ独逸南洋燐礦會社ト業務ニ於テ稍其ノ趣ヲ異ニスルモ其ノ業務カ對手國政府ノ特許ニ基クモノナルト又該會社ノ成立カ單純ナル商事會社ナルトニ因リ大体南洋燐礦株式會社処分ノ為列挙シタル條項

ヲ標準トシヤルート会社ニ関スル我帝国ノ要求理由並処分方法ニ便宜応用スヘキ事

第二十二 該ヤルート会社ハナウル島其ノ他ニ於テ燐礦採掘ノ権利ヲ小額ノ借料ニテ英國人ノ經營ニ係ル大太平洋燐礦会社ニ九十九年ノ期限ヲ以テ貸付クルト共ニ該会社ノ株主トナリテ利益分配ニ与リ居ルヲ以テヤルート会社ヲシテ太平洋燐礦会社ニ対シテ其ノ曾有スル一切ノ権利ヲ讓渡セシムヘキ事

第二十三 帝国政府ハ衡平ノ見地ニ基キヤルート会社ノ業務經營ノ為ニ投資設備シタル私有財産ニ対シテ提供スヘキ金額ハ金六拾壹万二千九百五馬克ヲ標準トシ若シ引渡サルヘキ船舶ナキ場合ニハ右金額中ヨリ金參拾四万五千馬克ヲ控除シ第十四項第十六項及第十九項ノ規定ヲ準用シテ妥協ヲ図ルヘキ事

第二十四 該ヤルート会社諸支店ノ閉鎖及使用人ノ退去ニ關スル処分ニ付対手国政府ヨリ其ノ不法ヲ抗議シ損害賠償ヲ要求スル場合ニ於テハ帝国政府ハ諸島占領ノ當時其ノ安寧秩序ヲ維持スルト同時ニ帝国軍自身ノ安全ヲ防護スル為ニ警戒ノ手段ヲ取ルノ必要アリタルト又該会社ノ

無記名ナルヲ以テ対手國ノ持分ノ範囲及内容甚タ不明ニシテ且錯綜ヲ極ムルノ事情ハ之ヲ察スルニ難カラス仮令帝国政府カ蘭国政府ト交渉スルモ果シテ我要求又ハ主張ヲ貫徹シ得ルヤ否不確実ナルノミナラス此ノ間ニ乘シテ対手國ノ株主ハ其ノ所有株券ヲ処分シ帝国カ条約上ニ譲受ケタル持分ヲシテ有名無実ナラシムルノ虞ナントセス隨テ該会社ノ処分ニ關シテハ此際帝国政府ヨリ対手国政府ニ対シ何等問題ヲ提起セス対手国政府又ハ該会社ヨリ買収ノ提議アルヲ待ツテ始メテ之ニ応シ廉価ヲ以テ之ヲ買収スルノ手段ヲ購スヘキ事

第二十七 該会社ノ財産中ヤルート会社出資以外ノ私有ニ

属スルモノニ対シ補償ノ必要アル場合ニハ金貳拾万馬克ヲ超エサル範囲内ニ於テ帝国政府ハ衡平ノ見地ニ基キ第十四項第十六項及第十九項ノ規定ヲ準用シテ妥協ヲ図ルヘキ事

第二十八 東カロリン植樹会社ハ其ノ特許契約ニ關シ対手国政府ト照覆中日独開戦トナリ未タ成立ニ至ラサリシヲ以テ同会社ニ關シテハ此際帝国政府ヨリ何等提議スルノ必要ナキ事

第二十九 独蘭電信会社ハ獨蘭両國間ノ協定ニ基キ其ノ特別監督ノ下ニ成立シタル会社ニシテ其ノ經營敷設セル海底電線ハ南洋ニ於ケル新領土ト帝國本土トヲ連結スル唯一ノ通信線ニシテ軍事上通商上重要ナル機関ナリ随テ此ノ会社ヲ帝国ノ掌中ニ收ムルハ最モ必要ナリト雖モ該海底電線ノ陸揚地点ハ蘭領殖民地、米領殖民地及支那領土ニ跨リ独リ対手国政府ノミトノ協定ニ依リ妥結スル能ハス到底最後ノ決定ハ之ヲ蘭国米国支那國トノ交渉ニ待タサルヘカラス而シテ該会社ノ事業権利及財産ハ独リ対手国政府又ハ其ノ臣民ニ專属スルモノニ非ス和蘭国政府及其ノ臣民モ亦其ノ持分ヲ有シ加フルニ該会社ノ株ハ総テ

因リ主要部ハ破壊セラレ残留スルモノハ僅ニ荒廃セル家屋及倉庫ニ過キシテ其ノ価格モ極メテ僅少ナルモノナルカ故ニ斯カル瑣末ノ事項ヲ講和条件中ニ加フルノ不得策ナルヲ認メ此際之ヲ提出セシテ南洋諸島ノ我帝国領有ニ帰シタル後ニ於テ該会社カ対手国政府ヨリ附与セラレタル特權ノ行使ヲ禁止シ殘留設備財産ハ一定ノ期間ニ之ヲ撤去セシムルカ又ハ買収ノ提議ニ応スルカ之ヲ講和条約成立後ノ処分ニ譲ルヘキ事

尚別紙第三号ハ往電第六三三号(註)（在仏大使宛往電第一六二号）ト全然同一ナリ

註 珍田大使宛往電第六三三号ノ扣ハ外務省ノ記録ニ存セズト

雖ドモ右ハ左ニ附記トシテ掲載セラレタル「ウイ爾ソ」ノ講和条件十四個条ニ対スル帝国政府ノ意見ト同文又ハ同趣旨ト推定セラル該帝国政府ノ意見ハ十一月十三日及十九日ノ外交調査会ニ附議セラレ同会ニ於テ修正可決セラレタルモノナリ

#### （附記）

ウイ爾ソノ十四個条ニ対スル帝国政府意見

#### 一、(註) 國際間ノ約束ニシテ何等第三國ノ権利利益ヲ侵害セス

又何等國際信義ニ違反セサルモノニ付テハ之カ公表ヲ強ニ

ルノ必要ナキコトアルベク又外交案件ノ交渉ニ際シ其ノ進行及経過ヲ秘密ニ附スルヲ適當トスル場合アルハ一般ニ承認セラル所ナルベシ尤モ今一層広汎ナル意義ニ於テ一切ノ秘密外交ヲ絶滅セムトスルノ議アルトキハ各国ノ意向ヲ稽へ全局ノ利害ニ顧ミ大勢ノ赴ク所ニ順応スルヲ得策トスベク帝國孤立シテ留保ノ態度ヲ固持スヘキ必要ナシ尙ホ締ノ条約ヲ此際一切發表スルノ議ニ付テモ帝國獨リ強テ異議ヲ唱ヘサルヲ可トス

二、海洋自由ノ問題ハ英米間ニ於テモ既ニ意見ノ相違アリテ海上権力ノ優勢ナル國ト本問題ヲ狭ク解スルニ努ムヘキハ自然ノ趨勢ナリ本問題ニ對スル帝國政府ノ態度ハ日英同盟並軍備制限問題トノ關係上極メテ微妙ノ点存スルヲ以テ若シ國際連盟並軍備制限ノ議カ極メテ廣汎ナル意義ヲ以テ決セラレ從テ今後同盟協約ノ存在カ國際間ニ認メラレザルニ至ルカ又ハ日英海軍カ協同策動スルモ其ノ効力ヲ發揮シ得ラレサルカ如キ事態ヲ見ルニ於テハ別ニ考量ヲ加フルコトヲ要スルモ事茲ニ至ラザル限り大体ニ於テ英國ト歩調ヲ一ニスルヲ得策トス

#### 三、經濟障壁撤廃ハ具体的規定ノ詳細ニ入ルニ非サレハ容

易ク之カ賛否ヲ表シ難シ帝國政府ノ所見ニ拠レハ本問題ノ主張ヲ極端ニ拡充スルニ於テハ一國ノ經濟的施設ハ他國ノ為メニ蹂躪セラルニ至ルノ虞アリ殊ニ帝國工業ノ現状ニ於テ他國民ニ対シ全然内國民ト均等ノ待遇ヲ与フルコトハ同意シ難キ所ナリト雖モ他國民ニ均等ノ待遇ヲ与フルノ趣意ニ止マルニ於テハ大體帝國ノ為ニ有利ナリト認ム本問題ニ付テハ既ニ巴里經濟會議ノ方針ニ関シ米國ハ異見ヲ有シ居リ從テ如何ナル程度マテ与國側乃至米國ノ意見ノ合致ヲ見ルヘキヤ予測シ難シト雖モ帝國代表者ハ前頭ノ趣旨ヲ体シテ折衝スルコトヲ要ス尚ホ本問題ハ所謂勢力範囲、關稅制度、移民問題等各種ノ問題ニ影響スルコト少ナカラサルヘキモ此等細点ニ付テハ必要ニ応シ更ニ訓令スヘシ

四、軍備制限問題ハ第一平和會議以来ノ宿題ニシテ今回ト雖モ各國共ニ満足ニ一致スヘキ徹底的ノ解決ニ到着スルカ如キ事態ハ容易ニ出現セサルヘク又帝國政府ノ立場トシテハ可成スル制限ニ拘束セラルコトヲ不得策ト認ムルモ帝國代表者ハ可成和平又ハ人道主義ニ反対スル態度ヲ避ケ会議ノ大勢ニ順応シテ可ナリ

五、殖民地処分問題ハ本戰爭ニ關係ナキモノマテ講和會議二六 パリ講和會議準備一件 五三八

ノ議題ト為スハ之ヲ避クヘシ而シテ帝國政府ノ閔スル限りハ青島及獨領南洋諸島ノ処分問題ニシテ之ニ付テハ松井大使宛往電第一五一號訓令ニ拠ルベシ尤モ本問題ノ要点ハ独領阿弗利加殖民地ノ処分ニシテ英國最モ利害ヲ感スル所ナルヲ以テ帝國代表者ハ帝國ノ主張ニ齟齬セサル限り英國ト歩調ヲ一ニシテ可ナリ

六、歐露問題白耳義問題、仏國被占領地問題、伊太利問題、墺洪國問題、羅塞里等ノ巴爾幹問題、土耳其問題、波蘭問題ニ關スル「ウイ爾ソ」氏十四箇条中ノ諸点ニ関シテハ帝國政府ハ大綱ニ於テ同氏ノ主張ニ異議ナク帝國代表者ハ會議ノ大勢ニ順応シテ可ナリ

七、國際聯盟問題ハ最モ重要ナル問題ノ一ニシテ其ノ終局ノ目的ハ帝國政府ノ贊成スル所ナリト雖モ國際間ニ於ケル人種的偏見ノ猶未タ全然除却セラレサル現状ニ顧ミ右聯盟ノ目的ヲ達セムトスル方法ノ如何ニ依リテハ事實上帝國ノ為メ重大ナル不利ヲ釀スノ虞ナキ能ハス又聯盟加入國ト未加入國トノ間ノ關係ニ付テハ果シテ如何ナル待遇ヲ為スヘキカ頗ル難問タラサルヲ得ス故ニ本件具体的成案ノ議定ハ成ルヘク之ヲ延期セシムルニ努メ單ニ希望案ノ如キモノニ

取纏メ制度ノ実行方法ハ各国ノ宿題トシ更ニ実行シ得ヘキ成案ノ討議ヲ将来ノ相当ノ時機マテ各国ノ熟考ニ附スルヲ可トス尤モ國際聯盟ノ組織セラルル場合ニ於テハ帝国ハ結

局聯盟外ニ孤立スルコトヲ得サルヘキヲ以テ本問題ニ関シ何等具体的提案ノ成立スヘキ形勢ヲ見ルニ至ラハ前頭人種の偏見ヨリ生スルコトアルヘキ帝国ノ不利ヲ除去ゼンカ為メ事情ノ許ス限り適當ナル保障ノ方法ヲ講スルニ努ムヘシ

註1 外交調査会ガ政府案ヲ修正セル箇所ハ第一項ノ冒頭ニ

「秘密外交廢止ハ帝國政府ノ主義トシテ贊成スル所ナリ

モ」トアリタルヲ削除シタル点ナリ

2 松井大使宛電第一五一号ニ付テハ前掲四六三文書參看

五三九 十二月二十七日

戴天仇ヨリ  
西園寺侯爵宛（電報）

### 東方通信社ノ東京電報ニ關連シ中國ニ於ケル

#### 列強ノ勢力範囲撤廃ヲ切望ノ件

東方通信社ノ東京今日ノ電報ニヨレハ貴國ノ政府部内ニ於テ各国カ支那ニ於ケル總テノ特種地位即チ日本ノ満洲、青島、福建ニ於ケル、仏蘭西ノ南部支那ニ於ケル、英國ノ揚子江沿岸ニ於ケル勢力範囲ヲ全部撤廃スヘシトノ説盛ニ主張サル由

謹テ斯ル新聞電報ノ誤伝ニアラサルヲ望ミ且ツ閣下ニ敬意ヲ表シ併セテ努力ト健康トヲ祈ル

（欄外註記）

十二月二十七日西園寺八郎氏ヨリ受領

五四〇 十二月二十八日 在上海有吉總領事ヨリ  
内田外務大臣宛（電報）

梁啓超一行歐洲向出發ノ件

梁啓超一行本日出帆ノ横浜丸ニテ出發渡欧セリ

在支公使ヘ電報セリ

第二〇〇号

五四一 十二月三十一日 在伊国伊集院大使ヨリ  
内田外務大臣宛（電報）

在巴里中國公使館ノ反日運動ニ關スル情報報

告ノ件

第二三三四号

コハ実ニ今マテ貴國ヨリ伝來スル消息ノ最モ喜フヘキモノト確信ス若シ果シテ事實ナラハ日支両國ノ永久的親善ノ最大ナル動力ナルヘシ

今マテ支那ノ世界的文明ニ參加スル機會ハ殆ント列強ノ支那ニ於ケル勢力範囲ノ設定即チ列強ノ政治的・經濟的軍國主義ノ對支政策ニ依ツテ（電文不明）永ク駆逐サレントス、コノ文明開發ノ最大障壁タル列強ノ勢力範囲ヲ撒廃スルハ實ニ東西洋諸國ノ國民的生活ト理想トノ一致ヲ來タス最善ノ方策ニシテ而シテ世界ノ永久的平和ヲ保証スル唯一ノ道ナリ

今ヤ支那國民ノ日本ニ對スル疑惑ト惑感ハ實ニ絶頂ニ達セリ而シテ此ノ疑惑ノ生スル所以ハ蓋シ日本ノ軍國主義ニ基ク対支政策ノ結果ニ外ナラス、貴國カ若シ此ノ世界改造ノ空前ナル機會ニ際シ世界的正義ノ上ニ立チ一切ノ軍國主義ニ基ク対支政策ヲ放棄スル方針ヲ採リ且ツ列強ノ同政策放棄ヲ徹底的ニ主張スレハ兩國民間ニ於ケル多年ノ疑雲ヲ一掃シ得ルノミナラス兩國民ノ理想ト生活トノ一致ハ之ニヨツテ確保サルヘク而シテ吾カ東方民族ノ世界文明ニ貢献スル機會ハ實ニ多大ナルヘシ

前略  
往電第二三二号末段ニ関シ

註伊集院大使來電第二三三号（十二月三十一日発）末段ハ在

支那公使館ノ日本反対運動ハ特ニ「ウエリントン、クワ」

在米公使等「ハウス」大佐ノ信任スル在仏參事官 Fraser

ヲ説キ日本ハ蒙古ヲ占領シ支那ト歐洲ヲ中斷セントスル野

心アリト語リ若クハ膠洲灣ヲ速ニ返却セシメズンバ日本ハ

後日独逸ノ租借期限中代リテ租借ヲ申出ツヘシナド極力日

本ノ悪口ヲ云ヒ居ル由「フレージア」ヨリ聞ケリト

在歐米各大使ヘ転電セリ

註 伊集院大使來電第二三三号（十二月三十一日発）末段ハ在  
伊日本大使館ノ情報者（巴里ニ出張）ノ伝ヘタル情報ニ依  
レバ「在巴里支那公使館ハ米國大使館參事官ヲ説キハウス  
大佐ヲ經テ日本ノ支那ニ於ケル帝國主義ノ發動ヲ充分ウイ  
ルソン氏ニ説カソコトヲ依頼セリ」ト報告セルモノナリ尚  
本電（第二三四号）モ右情報者ノ報告ナリ